

氣の變りて。證は寒熱といふ。枝葉の論なり。療治はいたりて。或は温。或は涼。或は發散し。或は收瀉する。療治の手段にて。こゝにいふをまた

一節分は兼木をうつ事。五島の俗。節分は童子をひて。兼木をうちたゞ。来年の枝のたわむまでなれといふ。蛸後草木をむちうち。萌動せしむといふこと。おもひあはせておもしろし

一張良隱遁。唐土の三代以後。有力の人天子となる故。大臣疑る者多し。張良が赤松子に従ふを始めて。堂々たる李鄴侯陶隱居なども。其類なり。其言癡人と見ゆる計なること多けれども。其愚不可及の類なるべし

一諱字の説。諱は木火土金水を次第してつくること。いつの頃は始りしか。宋人ことと多し。張俊の子。名は拭。朱子の父は松。子の塾。在後は俊あり。その子餘多ありけれども記せむ。明の天子。或は朱子の遠孫なりとして。代々の諱これに従がれしといふ。これ王相の説よとる。いあらざることある。世遠くあり。扁傍よりて。誰いたれの兄弟。何某の何某の子孫などいふを。便りあり。排行の稱呼すたれし後。これ亦益あり。吾邦近世。俗薄くして。兄弟といへども貧なれば。齡せられざる者ある。いたる。

五行を必とせむ。一門の。よくそれとされる稱を用ひて。や、流弊をたむる。たよりすべし。よこそ

一通稱之説。記事の文。近代の人。諱まれば。何某右衛門何某兵衛とかくべきの論なし。まかるを。文字俚なりとして。彌三郎を單に彌と稱し。又太郎を又。平右衛門を平とかまじあり。學びがてら。一語を記するごとき。いふ。たらず。記録史志の類ならべ心あるべし。太郎次郎。通用よそへて稱するなれば。はぶきてもよしとせば。彌又の親も三郎。子も三郎なれば。其子を彌三郎。又三郎などいふ。彌も又も同じく。通用の稱なり。其人の名。いあらむ。平右衛門。源兵衛。もと平氏の右衛門。源氏の兵衛なり。されば。これも名といひがたし。今時稱謂みだれて。かゝるけじめもなければ。せんかたなく。何某右衛門。何某兵衛とかくの外なし

一在名。庶人の。在名を名乗ることをゆるされむ。然るを。姓を禁むといふ。まからむ。源太郎。平二郎皆姓なり。誰も答められし人なし。秩父。熊谷などの在名なり。これに禁あり。今座頭官目。在名といふ格ある。よてもあるべし

一韓公排佛。退之佛を排する。遊手多くなりて。世わたりのかたくなるをいふ。後

世其說淺易なるを満足せざる人多し。されども。推究して論をれば。こゝよとゞまるなり

一佛法八宗 近世佛家。八宗をわかち。各々其主領をたてられし。良策なり。邦俗ものよまよひやすき故。此法をければ。末々天下一宗となりて。國家の變をなさんとははかられず。元龜天正の事。よてもあるし

一諸侯室家 諸侯妻子を具して。都下。に住すること。古今。よなき良圖なり。創業の人。功臣をうたがふこと。昔より多し。大國。に封ぜられ。遠方。にはなれ居るもの萬夫の雄。韓信がごとき。もとより高祖のおそるゝ處なり。一旦の讒口。かり。よも叛逆のこゝをとかは。危ぶまざる人のあらじ。是を都下。に置きて。常々。よ相見るなら。讒もいりがたく。疑も生じやすからむ。され。ば。妻子。と。よも。都下。よお。く。國家の備のみ。よあらず。諸侯をたもちやすんずる良策なり。但。豐臣家の時。都下の住居。よものなれずして。用度多く。領地疲弊し。人心もあやぶみたりしか。今。の世。のさもあらず。唐土。の。幅員廣ければ。此法。の。とても行。れ。が。た。か。る。べ。し。殊。よ。今。の。都。燕。な。れ。ば。雲南。省。より。の。萬里。よ。す。ぎ。往。來。一。年。も。經。べ。し。然。れ。ど。も。成。都。あ。た。り。よ。て。任。子。を。生。長。さ。せ。

そこよて妻子をもた。く。へ。子。を。そ。だ。て。さ。せ。數。年。滯。る。う。ち。北。京。へ。も。ゆ。き。な。ど。す。る。こ。と。や。す。か。る。べ。し。廣。東。西。の。抗。州。秦。隴。の。洛。陽。な。ど。よ。さ。だ。め。遠。近。よ。よ。り。て。其。法。を。た。て。な。ば。さ。ば。か。り。か。た。か。る。ま。じ。ま。よ。や。其。國。主。死。し。て。任。子。必。ら。ず。跡。を。つ。ぎ。其。子。ま。た。其。地。よ。の。こ。り。て。任。子。と。な。ら。ば。の。ち。よ。の。そ。こ。を。家。と。ま。る。心。よ。も。な。り。て。さ。の。み。の。う。れ。へ。ざ。る。べ。し。其。本。國。よ。も。ま。た。他。國。よ。儲。の。主。人。あ。り。と。し。ら。ば。亂。を。防。ぐ。の。道。も。ま。た。其。中。よ。あ。る。べ。し。よ。

一國家良圖 今時の制。もとよりありける大國の諸侯をもとのごとく立ておき給ひ。諸筭の家をば。大國。よも封ぜられず。爵位もさ。ば。か。り。あ。が。め。た。ま。さ。さ。る。の。國。家。謙。謙。の。美。事。よ。し。て。い。ふ。を。ま。た。ず。諸。筭。の。諸。侯。も。我。よ。り。國。大。よ。位。の。高。き。人。多。き。ゆ。ゑ。心。ゆる。ぶ。事。な。く。國。家。を。い。た。ゞ。念。ふ。か。し。此。制。も。又。い。よ。し。へ。な。き。所。の。良。圖。な。る。べ。し。晉。よ。吳。を。亡。さ。ん。と。す。る。時。張。華。山。濤。な。ど。敵。國。外。患。な。き。時。の。あ。や。ふ。き。よ。し。を。い。ひ。吳。を。た。て。お。く。を。良。策。と。い。さ。め。し。か。ど。も。用。ひ。ら。れ。ず。し。て。吳。よ。つ。ゞ。ま。て。晉。も。滅。び。たり。是。の。利。害。を。見。て。い。ひ。し。な。れ。ば。速。應。ふ。か。し。と。い。ふ。べ。し。國。家。の。仁。義。も。て。物。し。た。ま。へ。る。な。れ。ば。雲。泥。の。異。の。あ。れ。ど。も。暗。合。せ。る。處。も。あ。ら。ん。予。こ。の。說。を。持。し。て。久。し。く。い。ひ。出。で。ざ。り。し。を。

十餘年前。頼千秋父子と。竹原に會せし時。歴史を論ずるより。いひ及ばせし。座上にて。いらへもせざりしが。數月の後。かれより書中。卓見なりとゆるし來れり。

一大食會　いつのころか。備後福山。大食會といふことをはじめしものあり。其社の人。皆夭折せり。ひとり陶三秀といふ醫者ありしが。これに。そやくさとりて。其社を辭して。六十餘までいきたり。予が若き頃。三秀が甚だ小食なるを見て。其よしを問ひし。其社中。皆異病にて死し。おのれ減食して。まぬかれしといふ。其後。近村平野村。また。この事はやりて。人多く異病をやみぬ。其社中。清右衛門といふ若者あり。膂力も人よりすぐれ。無病なりしが。ふと遺溺す。それよりまげくなりて。つひに坐上に溺るるを覺えず。發狂して死したり。食ふてすぐは。食傷にせざれども。つもりく。不治の病となるなり。一日は五合の食。吾邦の通制なり。是にて。飛脚をもつとめ。軍もいづるなり。されば人々心得べき事こそ。軍行の一日。二升のかてり。其時々の事にて常はあらず。

一大酒　備後中條村。三藏といふ人あり。其家僕。酒を好むものあり。或日。三藏其ものを見て。汝。酒いかほど飲みな。飽くべきかと問ひし。其もの生来貧しければ。

心のまゝ。またふべしことなし。大抵一升にて。たりなんといふ。さらばとて。一升飲ましめければ。忽ちのみつくしぬ。このめづらしき上戸なり。なほも飲めやととへば。いよ／＼悦ぶを見て。又。一升をあたへける。これも苦もなく飲みて。やがて卧したりけるが。其夜半。死してけるとかや。外もかゝる事三四度も聞きたり。是は三藏まゝなり。まゝなり。すべて。酒は小杯にて。一日半日ものむ。覺えず量をすぎし。つもりて。病をなす。大杯にて。おのれが量だけ一度は飲むもの。酒の力。一時は出でつくを故に害なし。是は予が數十年見およびし人。皆然り。されども。量を過ごせば。大杯にて一度のむの害。小杯にてながくのみし。まさと見えたり。

一詩歌語勢強弱　あら海や佐渡に横たふ天の川などいふ發句。興象の論なし。語つよくおもみありてたけたかく。今の人の句。語弱くかろく。格ひさく。僅十七字にて。その體のわかること。語勢自妙の妙處なり。詩歌に。さらし心つくべきや。歌に。

「まは人の麓の路やたえぬらん軒端の杉は雪おもるなり

これらの意。尋常なれども。語におもくしてつよし。撰み出でば多かるべし。老杜が詩をよみて後。後人の詩を見れば。いづれも弱く軽くおもはるるうち。明の李空同のみ。

杜が遺響ありといふ

一古文辭 揚誠齋詩話。如山谷程々毛筆。平生幾兩展。身後五車書。平生の二字論語よ
出づ。身後の二字。張翰云。我をして身後の名あらしめん。幾兩展。阮孚が語。五車の書
の。莊子の言。惠施此兩句の四處合し来るといひ。これらの句を妙なりとす。妙ならざる
よあらざれども。詩の歌謠なり。必しも。心を用ふべからず。同頁の四六の古語を丸めて
出だし。一二字かへて取り用ひたるを妙とす。明の于鱗が。古文辭といふもの。古語と古
語とを續けあてまること。これらより出でたるなるべし。當時の元美が輩。宋人の才な
きをぞしる。その肯綮をあらざるよ似たり。北斗闌干南斗低などいふ句。陸放翁あり。
于鱗よも此類多かるべし。是ぬすみたるよあらざれども。其意念速からざるを見るべ
し。今の人と。宋と明との事ごとよ。雲泥のたがひあるやうと思ふいかゞや
一扇を笏のごとくもつ説 今の人。神を拜するよ扇を笏のごとくもつことあり。昔
我物語よ。あらためて禮をするとき。扇を笏よりなほしてといふ詞あり。又。考安い
ふ。笏なきとき。たゞ紙を用ふること故實のよし。御厨子所預高橋若狭守が。禁庭よ
て鶴の庖丁せし時よ。上より物賜はりければ。笏のかとりよ。懐中のたゞ紙をもて拜

せしかば。一時の公卿。其故實よ遠したるを譽め給ひしとなり

一ナゲシ敷居

上のなげし。下のまきあといふ。近世のことなり。一間ごとよ。其間

またかきまきあありしをなけしといふこと。源氏よも見え。また。義經記よも見ゆとい
ふ。荒木爲五郎話

一裸形の國

數年前。藝州の人漂流して。一國よいたる。其國みな裸體にて。禪のみを

まよふ。國の會とき。巡視するよあふよ。王も后もみな裸體なり。芋多く生じて。土中
よ入れて煨しくらふ。其葉を植ゑおかけ。又。芋をなす。外よ穀食をることなし。この裸
國へ。藝人大海中よ難船せしを。蘭船きたりたをけて。この裸國へあづけおきて。翌年日
本よつれ来れるなり。かやうよ漂流人を連れ来れば。日本人よ限らず。あらぬ國人よて
も。褒美金を賜ゆる故なりといふ。武元景文其人よ逢ひて。其話をき。詩よ作れり。今
いあまされたり

一怪異

世よ不思議なる事。種々これあるものを。佛者の。怪異の。吾家の家業のご
とく。儒者の。つとめてこれを排するを。これも亦家業のごとくおもふこと。常となりた
り。伏羲いまだ出でざる前よ。釋迦未生の前も。天地のおなじことなるべし。いかでかく

いわかれ異なる事となり来りしか。こゝを覺悟せる人。世はいくむくぞや。大徳知識と指さすれ。吾身も大悟徹底とおもへる人も。何某寺ももと水なかりしを。住吉大明神との開山とやらんを歸依して。水を獻じたまひしより。湧泉ありといふやうなることをもて。儒生よむかひても誇る者あり。またある儒生周易の志るしあることを奇か偶かといふ。辻占よおなじといふもあり。皆一笑の資といふべし

讚州金毘羅の町。文化丙子臘月。十三四家焼失を。其前數日の間。所々豆腐菟蒨等をてあり。天狗か狸のせしよやと。あやしみ居たりしが。のちよきけり。祈禱をする僧のいづくともなく来りて。近きあひだは火災あらん。是を道れんよ。金いくむくを捨ては。豆腐こんやくいくむくを捨てよなどいふよよりたる事なりしと云ふ。世よかゝるふしき多かるべし

一柳は數種ある事 予が塾は柳三種あり。一は京の下河原は摘星樓として。六如上人の房の庭はありし柳の枝をさせるなり。もと繁綿多かりしが。水土よよればよや。今のすくなし。一は蘇州府の種として。長崎の徳見茂四郎より送り来る。一は蜀柳にて。荒木爲五郎より得たり。此柳は。西洞院風月入道殿。主上より賜りしをわかちて。平松宗致よ

給ふ。宗致備中松山人ゆゑ。故郷へもわかち植ゑたるなりといふ。荒木の松山人なり。予と善し。蜀柳は近頃枯れたり

一雅事之説 凡。用事と雅事とかねざる。眞の雅事よあらず。障子の腰は繪をかきたるは。はめかふるとき右よ左よとまよひぬ。又趣もありてよしといふ。この事萬事よわたるべし。何某公の領内の沮洳の地を堤して。湖となし給ふ。形勝もまさり。又。灌漑をたすく。この類世間よ多かるべけれど。吾便宜よ志す人の。人の不便をもてからず。雅事よ志す人の。吾家の不利をも省みざる者多し。但。雅事のみよしてよき。家を子弟よ譲りて。隠居せし人と。僧とのみなり。膏腴の地をすて。柳櫻を植ゑたるのみいかあらん。隠者といふものも。世わたりの業はなくていかならず。長沮桀溺も。耦耕する世わたりなり。陶朱公があきをひも同じ。隠者といへば。風月のみよて。家のいとをみもなき。る者とおもふ。世界もあらぬなるべし。孟子のいへる抱關擊柝も隠者なり。膠鬲が魚鹽も隠者なり。僧の托鉢乞食して。世をわたるよりして。みづからなす者をそしるは誣ふるなり

一盗入たる時可得事 一つの頃よか。備中さいちといふ所よ。細見勘分といふ

ものありける。ある夜盗の入らんとするを知りて。其腕をとらへて。格子へ引きこみ。其うちよて物ヲ縛りつけて。刃刀をとり出だす。盗たまりえむ。自身其かいを斬りて逃けぬ成り同類の盗。其のち數月にして。盗また来り。勘分が寐入たるを刺し殺して去る。又甚五郎といふ者其所の志。盗を追ひかけいで。あやまちつまづき倒れしかば。盗たち歸り。一刀刺して去る。是も死したり。其後大坂などの町中よて。巾着まりの盗の人の懐中をさがすを。傍より見たる人。其人は知らせなどすれば。後盗必らむ其知らせし人。害をなす。或は人多き處よて。密に小刀よて。股脇腹などを刺されて死ぬる人もあり。また。人家は盗いりたるを。隣家より助けなどすれば。これも後日其家へ仇をなすとなり。されば。夫と知りても。あらぬ顔したまをけ。救ふことなし。よりに盗は公然として横行を。其地の人の。かゝることをおれども。田舎よりたまさか行きし人の。其心得あるべきこと

一 盗を防ぐべき説

備後の鞆の祇園會は甚屋といふ。小間物屋の前街。人の群聚する中よて。盗の物をとらんとせしを。人に見付けられて。海濱へ引出だして。海へ投せんとするを見て。店主人走り出て。其罪を詫びてすくひければ。會終りて後。一人つと

入り来り。私に先日御たすけはあづかりし盗よて候。一命の御恩を謝し申さんとして。参り候といひしかば。主人も其本心のいまだ亡にざるを憐みて。酒のませて物がたりし。其意届けて。盗人を止めさせんとす。盗も感泣して別れける。其ものがたりのうち。凡。ぬす人のいると。表の戸。裡門のあきたるを見て。心を生ずる事多し。人みを寐んとするとき。必ら門戸のとざせども。或はあかき男女のあそびありきなどよ出て。頓て歸るべしとおもへど。とくよも歸らず。或は戸ざしすれども。眠をがらよして。かたきさしえをなごする事あり。戸ざしぬ。かならむ主人かのれ自身すべきこと肝要なり。壁をうがちているぬす人。をどりこみなど。此例はあらむ。此用心は。また。格別なりといひて。返りしとなり

一 僧大典

大典は僧伽の文章家なりし。紫博士と同じく洛ありて。一面もせられざりしが。或とき権門の席よて。そこから出であひて。大典聲をかけて。そなたは紫先生ならむや。始めて御目よかゝり候。大幸よ候へとて。近寄られければ。紫博士はこれ京に在りしこと。二十年計は候ひし。上人とい。嵯峨の花の下。廣澤の月の前よも。見参らせ申すべき。今日の。不思議の處よて。接見いたし候と申されしかば。同座の人々。一

時目を屬せし。大典すこし赤面せられしよし。其座ありし人。大典のさる人よのあらむ。そこよて赤面せし。さすがは學者なりしといひける也

一川之説 備後横尾の鶴が橋。もと鶴が濱として。舟わたしなり。其時の舟の楫棹など。今の橋守の宅に残れり。いつの頃の失火か。焼失せりとなり。今の川上水至りてあさく。やゝもすれは乾涸す。同じ川上。國分寺の西。鳥岩として。高さ三間あまり柱のごとき立石ありて。鳥。年毎に其うへに巣くふ。三十年前の川渡のとき。里の老人。昔の鳥岩。此あたりありしとして。長さ竹もて。沙中よさしむとむる。竹よさるものなかりしとぞ。川の埋れたること思ふべし。すべて。此川のみよあらむ。山木つきて。川高くなり。左右の良田。汗邪なる事いひ傳ふることなり。近頃。田地の濕淫洪水の憂のみならむ。井泉わくことたかく。水あしくなり。黄胖等の病。あづらふ人多くなりしやうは覺えらる。眼前の損益見えざれば。上たる人も。打ちまて給へるよや

一龜卜 龜卜の對州のこりてあり。其法龜甲をうらより小刀よて穿ち。一寸程を薄くするを鑽龜といふ。彼地よて。タフといふ木の。刺ある木なり。それを箸のやうにして。其先よ火をつけ。彼薄らげし處を裏より灼き。表よひらき入たる紋出で来たるが灼

龜といふ。其紋のさけやうを見て。吉凶を下す。其法。或時吉田家より望まれしかども傳へむ。甲の乾きたるを用ふ。生龜よあらむ

一水野義風雨乞和歌 備前士人。水野三郎兵衛。名の義風。食祿千石。大將なり。和歌を好む。一年。大旱の時。義風が采地の百姓ねがひ出でける。主人。和歌よ堪能よまじませば。昔の小町が例。雨乞の歌よみて給ひ候へと申し。かば。義風さま。辭すれどもさかむ。つひよ一首をよみて與へければ。百姓よろこび歸り。これを産神よそなへて祈りてぞしるしを得たりける。夫より今に至り六七十年。早まれば必その歌を出だして祈るよ。しるしなきことなしかや。其の歌

「世はめぐむ道し絶えむ民草の田ごとよくだせ天の川水

一鳥の巢より火出づる事 鳥の巢より火出づることあり。或は野ある焼土などの。たきさしの竹木をくこえ采りて。屋上よおとまことあり。筑前よ村落の近きあたり。巢をつくらんとするをば。かならむ追ひちらせよと。胥吏より觸れ知らるることありと。竹田器甫が話なり

一野寺の歌 備後賢泉寺の野中よあり。或ときそれよ會して保之が

「松幾木山と見るまで生ひそひて野中の寺どふりまさりける
とよみしを。歌よむ人見て。野寺のよみがたきものなり。かこりよ。たれくもよみ得
ざらんといひける。末の句。年ふりよけるよてありし。よくも覺えむ。

一 舊習改めがたき事

予。江戸に在し時。柴野先生は食卓と小榻四つをおくる人あり。八月十四日。その具よて。七寶羹を饗せんとして數人を招かる。其の夜雨降りて遠人の采らむ。予と尾藤博士と主人とその榻に踞して對酌す。久くして主人勝手に入られしあとよて。尾藤予をかへりみ。主人の居ぬうち。暫く下りて休息せばいかんといひて打ちわらえれし。予もまた絶倒せ。やがて主人いで采り其のよしをさ。實も久しく馴れたると改めがたく堪へがたき事あり。聖堂の釋菜。一事を勤めてんと願ふ人あり。其の人老いたれば。事少なき役をなさしめし。一器を持って久しく立ちてあるうち目眩して倒れし事あり。吾が邦の人の。坐よならうて立よならをむ。今夜の下りて休息も宜なりとて。又互に笑ひてわかる。文化元年の事よて。今より十四年前なり。某先生久しく瘡を患へていえし後。疲勞をやしなふこと數日。其の間よとやく鬚そり。鬚さらんとのみおもひき。かくては清人の辨鬚も昔よかへらんこと難かるべしとかた

らる。凡生采ならひしこと。遂に改めんこと皆此の類なるべし

一 變革

筑前の川よ。蜆貝次第は川上よのぼりて。山川の石川清流も生ず。寶滿山の五十町計も上る山なれど。そこまでも多し。川と海とのさかひは今もあれども。海を遠くして。あり采し處は年々少くなりて。今なき處多し。文化のはじめ頃よりのことなり。玲藏すめる木屋瀬村。もとの蜆多かりしが。今の少しも生ぜむ。十里計も上流へのぼるといふ。瀬田の蟹。いまは。大日山といふ處よりつりて多く。瀬田は尋常なり。この類の事。餘所よも多からん

又筑前古川村の近き岡。昔より貝多く。日々石灰を焼き出だす。いく千駄といふことをしらす。海より五六里を隔たる所なり。備中大島のみだけといふ。山の峯よけやきの大木あり。樹身一間計上よ穴ありて貝を生む。人とり盡しても又生む。貝は海よあるあらん。たひしやくと名づくる貝なりといふ

一 奇樹

寛政の中頃。予京よ有りし。美濃よりからたち花平地。本地。金牛の類十盆を駄し采りひさぐ。數日の中かひて采り集りてひさぐ。人百餘金を得て歸る。其の頃此のものこやりて。甚しき三百金餘よあたる。數寸の盆栽なり。其の後紀州は蘭をうゝることは

やり。是も大金を費せ故。官より禁ぜられても。其の禁をさかぬ。しては官吏家々よふみこみ。其の根株を斷じたり。其の後石菅蒲いばやめはやりて。京の一簣一盆を十六金よて買ふを見る。近頃文化夷子丑の頃。牽牛花奇を争ひ。佳種百品七十金よあたる。備中の人一方金よて一種を求めし。名種ればかりよて買ふべきのなして。こぼれ種といふ。名もなき數種を得てかへる。其の後江戸よも此の事はやりて。岡花亭その記をつくりて余よ示す。文政のはじめなり。享和のころ。備中備前よ文鳥を畜ふことはやり。これも一羽數十金よあたる。岡山藩よりいたく禁ぜられて。つひよやみぬ。芥川といふ書よ。其の時の事を記せる中よ。藝州廣島の上流よて。一僧佛具を川岸よあらひしが。一花の流れ来るを見れば椿の奇種也。其のまよとりて挿み。三四年よ奇花をひらく。城下の人日々よ見よ来り。川上よ其の種ありやと尋ぬるよ蹤迹なし。さて奇異の花なりといひ傳へて。いよく来客多くなりぬ。ある人たのぶれよ。貴僧の椿名花なりとて。國主より所望あるよしをかたりければ。其の日其の花を鉢植よして。其の夜亡命せしよしを載す。毛利家。廣島よおしせし時なり。かゝる事をりよあることよ

一 血氣之説　人の血氣母よ受くること多きよ。容貌賢愚も母よ肖たる人多し。周

勃文帝を立つる母の賢なるをえらびし妙なり

一 四聲　むかしの人の四聲をわかちて誦讀す。善道直貞博學よて。大學助陰陽頭などをつとむ。三傳三禮よくしかりしが。此の人四聲を辨ぜむ。教授みな世俗踏訛の音を用ふるよし。日本後紀等よ見ゆ。考安云。今。高野の學寮よ。まやうよみとて。四聲をわかちて誦讀することあり。又其の秘教の中よ。オコト點を用ふる者ありとぞ。彼處よ古代の遺風存せるよ

一 渡瀬氣候　興州渡瀬といふ。梁川より西北よあり。白石へいづる川の川上よて。出羽往來の地なり。渡瀬の半道ばかり南よ。六月よ寒く氷あり。石などの下の皆氷よて。樹の紅葉するものあり。冬よかへりて暖よて雪なし。仙臺領なり

一 蜂馬を齧したる事　文政元年九月。讚州高松の東三里石塚といふ處の百姓嗣右衛門といふ者の馬を。馬士近所の岡よ收し。馬を叢祠の側の古墓よつなきて。かのれ草をからんとせし時。蜂多く出で。馬を齧す。馬士見てはしり行きて打ち拂へり。馬士よも數あらむあつまり齧す故。たへかねて馬をひきて歸りし。馬人ともよ大よ腫れて。馬の二日を経て死す。馬を屠りて見るよ。毛の間よ蜂十四五くひつきて居たりしと。

近所の人池戸村周藏といふもの。九月六日は吾が塾に来り。其の家をいづるまで。馬士の死せざりしが。とても治すまじきよしをかたる。予若き時備後府中の僧。大醉して山中に卧したるを。大蜂あつまり螫して死せしよし。畫史墨隨が語りし。其の後はじめて此の異をきくぬ

一和習 大日本史に。朝廷の公事或人の稱號地名等の類。みを用ひ来れる字にてかゝれたり。たとへば。歌あひせを歌合とるく類。此方の一故事をなれること故。其の稱は志たがひたるなり。兵糧入れの詞も其の類なり。世の文人といふ者。和習といふことをいやしき事おもひ。あひて雅よせんとおもふより。却りて和習なること多し。御馬屋かしを白馬津といひ。目黒を颯山といふ類みな和習なり。これらの吟味の。水府よりもより精し

一田道公碑 田道公の碑といふもの。贋作なりといふ。蛇の字を蛇に作るの古體にあらむと。予曰。碑の贋作てもあらん。蛇字のいよしへまなしとして。これを以て決するのいかゞあらんか。情實といふ字出處なしとして。近頃の儒者たち搜索して閑情偶寄より看出だし。事あり。これのちかく都氏文集にも見えたり。都氏の延喜以前の人の

れば。ふるき文字もなるべけれど。今時ありふれたる書も見えし。凡。昔よの多けれども。書中に残ることの稀なるもあるべし。仁義禮智信とつゞきたる語。むかしをなし。漢儒陰陽災異などより信をそへしなどいふ説あり。これもむかしの書多く存せざれば。ありても傳はらざるも知るべからず

一雖の字 五山僧徒詩會に。一人。雖の字を得て。一句に薄命小僧得韻雖とつくりし事あり。魯堂先生。これを朝鮮の南秋月よかたられし。秋月。朝鮮も同じ事あり。詩人自古韻無雖とつくりき。枕の一名を吟雖といふ外に。雖は熟字なしといひしよし。後長慶集に。四雖吟あるを見たり。余この事を大坂にて子琴よかたりしが。其の後。子琴二律をよせて。吟雖を押したり。余それを和して。四雖を用ひし事あり。また其の後。宋人既に四雖を押し。事を佩文韻府にて見たり

一豊後山國川 豊後の日田より。豊前の中津へ十里ばかりみを峽中なり。川を山國川といふ。左右の峯巒樹石奇姿妙態をきらめて。道も平らかなり。千里を速しとせむして往遊するも。所謂一來を枉げざるなりといふ 以下久太良話

一薩州風土 薩摩の山。多くの肥後の山の流尾にて高山なし。海門櫻島霧島のみ

堀起して壯觀なりといふ。城下の富庶よして金銀多きよし見ゆ。琉人多く入りこみ。人家往來すること土人のごとし。人少き家よてり。琉人よ子を抱かせ。其の間よ水を汲みなどするをも見きといふ。琉僧の薩よて學問せざれば。國例。寺を持つことならむといふ。近頃の芝居も常あり。上方問屋といふ家五六あり。上方の歌妓百人ばかりもわかれ宿して。日夜出で、技を賣り。士人の家よも往來す。他處よてもひやりし異なり。士人よ容貌言語仕付方などいふ職ありて。風俗をたゞすこと。これも近頃始りしよしなり。地の暖よ。多く秋ふけて樹上よ蟬なき樹木よ蟬なく。蟬の十月までもいで。蛙もなくたぐひ。他國よ見なれぬ事多しとぞ。九州よ蟬をワクトウといふ。久留米の榊島勇七毎日酒をのむよ蟬のいで來るときを期とす。故よ人皆榊島がワクトウ酒といふと云ふ。

又肥後より豊後の竹田よゆくよ。九重山をこも。至高の所を上下すれども。路ひろくして險阻なしといふ。筑後肥後の平地四五十里寸歩の上下なし。たぐみの上をゆくごとし。秋後鶴の多きこと。他國の鳥の如しといふ。

一 柳絮海腸

柳花柳絮と異なること同所よ見ゆ。然れども花の後よ絮となるなれ

ば。絮を花といふも。詩などよの妨なきよ。吉貝の花を布となすといふも。絮を花といふなり。今俗よ云ふ海蛆腸ウヅノハの。子よて腸ウヅノハのあらむ。然れども古人の詩よ腸となしたれば。余また腸として作りたることあり。よく見れば異なり。

一 和漢合意

大阪なる人。妓を納れんとせし時。其の友播磨の歌水とやらんいふの俳句よ。うちへい

れな。やこり野で見よ。げんげ花といふを贈りき。清人もまたおなじことよ。間花只令間中看一折歸來便不鮮といふ句あり。絶域同情を見るべし。

一 中山貞藏傳

佐渡人中山貞藏。名の惟楨字の子幹。其の地の毛田かほらたといふ處の豪農

あり。はじめ郷師よ從ひて徠學をなし。論語集覽などを悦びしが。後よ覺ることありて。朱子を信じて行事よ心を用ひ。子幹が父の養子よて。其の家の血脈よあらざる故。血傳の人をいれて其の家を嗣がしめ。おのれの雁坂といふ處よ隱居し。數年の後。京よ來り住して教授す。貞藏もと五兵衛といふ。其の名の嗣ぐ人よ護りて。後の名よあらたむ。其の雁坂といふ處よ有りし。嗣人の行事を試たるなり。其の國よて一二と數へられし書をすてたるよて。其の後の行も知るべし。佐渡の家よ。一室。妖怪ありとて人のゆかぬ處あり。貞藏試よ二三夜寐しかども何事もなき故。其後の人もおそれずなりよし。余

が貞藏の遺像の賛。曾吹叔夜燭といひしその事なり。凡その詩はつくりたること
一々その實事なり。今時めづらしき人なり。方面よて色すこし黒く肥えじしよて温籍
なる人がらなりき。一儒生の不義なる行ありしを見て絶交せしなど。威嚴のありて全
徳の人なり

一池沼 文衡山が濯足劍池詩。都将雙足塵濯向千年沼といふ句あり。池沼わかつ
ことなきよや。此の類多し

一歌道評論 江戸の友人。長流。契沖以下の古體をよむ人の歌をあつめて一書をな
す。或人見て。真淵以後の人。中古の歌をそしる者多し。内々の何某公の歌の中よても。
きこえぬありなどいひてそしるもあり。今其のそしられし人々の歌をかくあつめ
見だ。此の集と孰れかまさらん。もし今の集まさらざる。そしりし人々心は慚ざらぬや
といひき。此の言われ人きよて。みづから警しむべき事なり

近頃の歌といふもの。拘ること多くして。おもふ事もいひがたかりしを。長流以下
の人々打ちやぶりし言葉の道の大功なり。これより女文字の文もよくする人出づ。
京は萬蹊。江戸は春海はるみなど其の選と見えたり。萬蹊春海はるみを男文字をもよくよむ人を

り。春海予は逢ひしとき。昔の歌よみ人の多半儒生なり。古今集の撰者の官職よても見
るべしなどかたりき。春海名山の詩をこひあつむとて。予は淺間岳の詩をつくらしむ。
其の後程なく身まかりぬとき。ぬ。其の詩いくばくかあつまりけん
同じ時。千蔭ちかげもあひき。みな木村定重を分とす。定重俗稱俊藏といふ。與力衆なり。千
蔭は隱居して總髮なり。顔色容貌さしも歌人と見えたり。耳まひて息女を傍よかきて。
彼此の言を通ず。春海は半髡よて頭大よ下ほそりたる顔なり。一面舊知のごとく磊落
の人なりき

萬蹊は近江八幡の人。京よ住す。小男よて剃髮す。音吐大よよく談す

一徂徠先生 或云ふ。徂徠先生。一生楷字をかゝむ。安瀆泊は答ふる書。楷書の得か
ゝむ。性則然りなど見ゆ。此の人唐すきよて。和習といふこともて人を誹られしこと
多けれども。是も和習の一なり。唐山よ生れたらば及第もなりがたく。學者の林よも入
られざるべしと。余おもふよ。此の人唐よ生れたらば。文の一時の選なるべけれども。儒
學の見の異なるべし。たとひ奇説多くとも。今見ることくよあらざるべし。幸よ日本
よ生れて。文字の窳をひらきたること多し。小疵を求めてそしるべからず

又徂徠先生の書。如漢議宋儒聚訟雖程朱二公無有明辯今考之儀禮不須多言本自了々たりとあるよし。文字人よきたる故たおひあらん 然るは歐陽公の議を見れば。第一は儀禮をひき。詳細は辯ぜられたり。又清詩別裁は揚升庵が竊せられしを。程朱の正論といふ。これの嘉靖の事をいへども。なほ同事なれば清朝よても正論といふを見るべし。先生たましくわすれしや

一唐土四百州 東坡上書。每州催欠の吏卒五百人よ下らず。天下を以て是をいへば。これ常二十餘萬の虎狼散じて民間に在るあり云々。宋の天下。北は遼あり西は夏あり。雲南はもとよりすてたれむ。幅員漢唐のごとくひろからず。このつもりよて二十萬の四百州にあたる。されむ四百餘州といふ。宋の時のつもりよや。志かし一州は催欠五百人といへる一州は。なほほどの戸數なるか。さも仰山なることなり。王安石虐政のあとといへども。胥吏も戸數も格別の減少はなかるべし。されむ唐山土地のつもりも思ひまらる。此の邦三十萬石の邦。民數大抵三十二萬人。これ五百人の胥吏を設けて。其の年中のつとむべきこと催欠をべきことをつもりて見た。大抵よしらるべし。其のうち里正里甲もよりあるべき役人の。中元官のうちよいかやへぬあるべし 國々もとより大小あれども。大抵一村は一人ありて。五百村は五百人をなれむ。一州

五百人のつもりなり。勿論現今の一村千石の村は一人よてあるべし。或は二三百石の村あり。又三四千石の村もあり。大抵よいふべし

一詩の一二字は同母字を用ふ 詩の第一第二の句。同母の字を用ふるをいむ。それ故起句は通韻傍韻を用ひたる多しといふ。然れども去年此日泊瓜洲衰柳蕭々客擊舟白髮天涯嘆流落今宵聽雨古宜州といふあり

一知己 知己を。かのれを知るといふ。不已知より出づるなるべし 韓氏の文 孤山の智圓法師の開居編。徒弟多く韓文を信仰のあまり。韓氏の文字は佛をそじるあり。文の學ぶべし。僧として佛をそじるべからずと戒しめし文あり。予いま其の集を見り。西山翁の語なり 余この頃おもふ。歐陽公はじめて韓文をとをへ。やうくふるさ本をさがし出だし。よし見ゆ。智圓の公よりや。先輩なり。其の時僧徒まで稱せし韓文の。歐陽公の時稀なりしもいふかし

一白樂天劉禹錫唱和の事 白樂天は。劉禹錫とも韓公ともよし。柳子厚も。韓とも柳ともよし。然るは柳と白との集。そのうはさ少しもなし。唱和の勿論なり。劉は別して柳とは同黨の人よて。劉白唱和集もあれば。白ともしたしき友なり。されどそのきたな

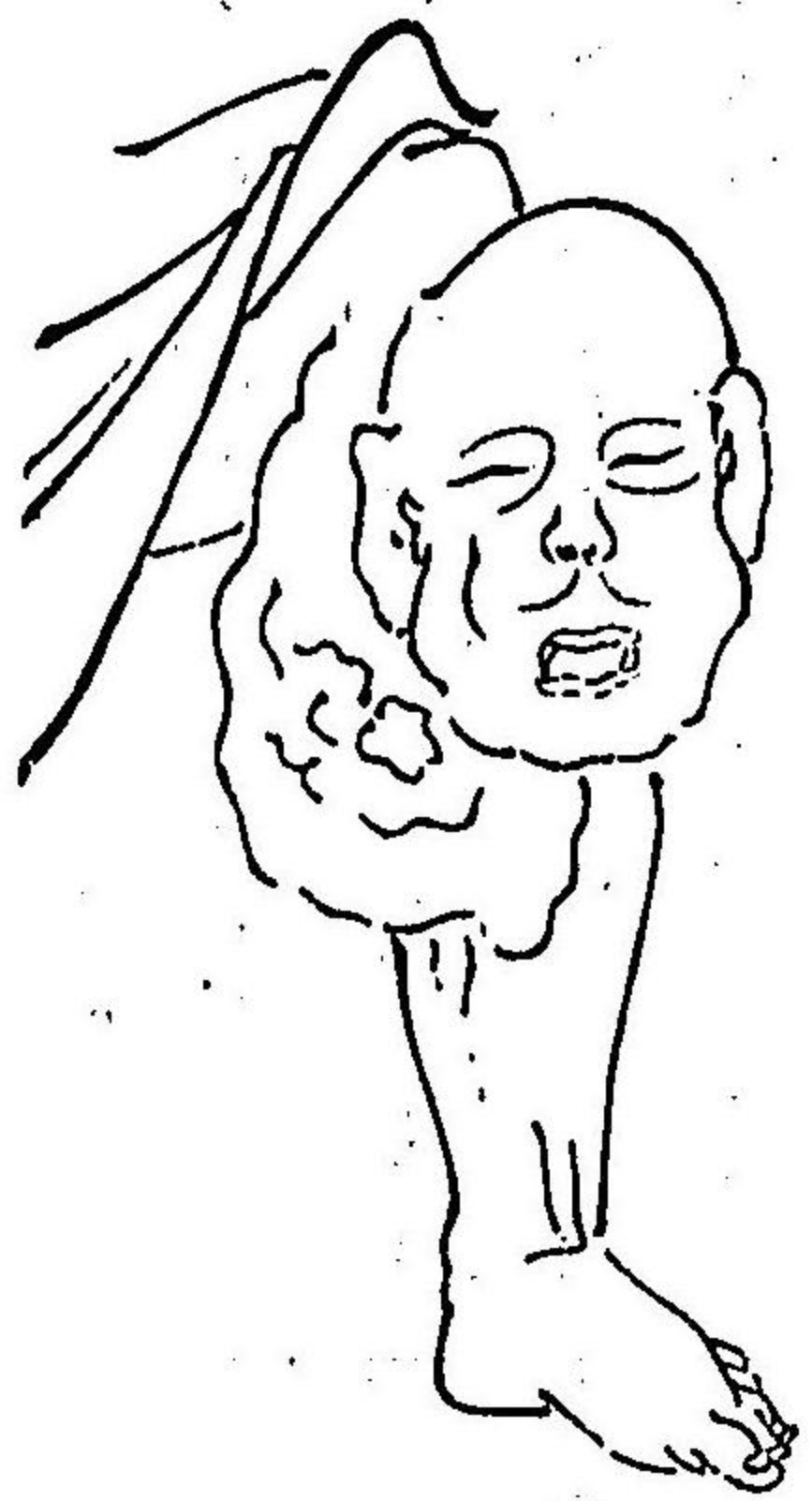
きこといなるべきよ。いぶかしき事なり 西山翁語

一人面瘡の語

仙臺の人怪病の圖並に記事左に載す

本文漢語を以てせしむべども。今兒童の
見やすからんため和解せ。覽者これを
察せ

王父月池先生嘗て余に語りて曰く。祖考華君の曰く。城東材木町に一商あり。年二十五
六。膝下一腫を生ず。遂漸よして大に瘡口泛く開き。膿口三兩處。其の位置略人面
像る。瘡口時ありて澁痛し。満つるに紫糖を以
てすれば。其の痛み暫く退く。少選ありて再び
痛むこと初のごとし。夫。人面の瘡。固より
妄誕に渉る。然るにかくのごとき症人面瘡と
倣すも亦可ならん乎。蓋。瘍科諸編を歴稽する
に。瘡名極めて繁し。究竟するに。其の症一因に係りて發まる所の部分。及び瘡の形狀を
以て。其の名を別つに過ぎざるのみ。人面瘡のごときも亦是なり。今茲に己卯中元仙臺
の一商客。門人よ分して曰く。或人速くより來りて治を請く。年三十五を加ふ。始十四
歳のときありて。左の脛上腫を生ず。潰れて後膿をながして不竭。終に朽骨二三枚



を出だす。四年を経て。瘡口漸く収る。只全腫不消歩頗難し。故に温泉に浴し。或は委中
の絡を刺し血を瀉す。咸應せむ。醫者を轉換するも。亦數人。荏苒として幾歲月。其の腫
却りて自ら増し。膝を圍み。腿を裂がせ。然して再び膿管數處を生じ。絞収まれば此に發
し。前よ比するに甚同じからむ。只絶えて疼痛なく。今年に至りて瘡口一處に止る。即先
に骨を出まの孔旁也。瘡口脹起多開し。あたかも口を開くの狀のごとし。周圍淡紅く唇
のごとく。微しく其の口は觸れば則血を噴る。亦疼痛なし。口上は二凹あり。瘡痕相對
し。凹内は各一皺紋あり。あだかも目を閉ぢ笑ひを含むの狀のごとし。眼の下は二の小
孔あり。鼻の孔の下は向ふがごとし。兩旁は又各痕あり。痕の邊は各堆起し。耳朶のごと
く。其の面楕圓根膝蓋は基して。頭顱の狀をなす。且患ふる處側々として動あり。呼吸の
ごとし。衣を掲げて一たび見れば。則言を欲する者に似たり。復約略人面を具するにあ
らむ。強ひて人面をもつてこれを名づくるの類なり。而して脛の内廉腿股に連り。腫大
にして斗のごとく。青筋縦横遮絡。これを按むるに緊ならむを寛ならむ。其の脈數にして
力あり。飲食減ぜむ。二便自可。斯症固よりこれを多骨疽に得たり。多骨疽の症。多くの
遺毒は出づ。而して其の瘡勢斯のごとくに至るものあり。只口内汚腐充填縁なく。餌糖

即貝母も眉をあつめ口をひらくの功を奏することあたはむ。文政己卯中元桂川甫賢國寧記

一赤壁賦韓文公廟碑説 徠翁の説。文の體を識んことを要す。東坡が赤壁の賦。あらむ。韓文公の廟碑の碑。あらむ。皆論なりといへり。予おもふ。赤壁の遊記を韻語として賦と名づけたる。よて論のあらむ。文中論もあれども。夫の客のことばと自身の話にて一座の興なり。其の事を論ぜんとて。こゝに遊びたる。よもあらざるべし。韓廟碑の賢人君子の事跡。天下後世の耳目にみち／＼たることをなれば。さらよいふ。及び。夫ゆゑ自家の感慨をもこめてかきたるなり。其の文の體裁。東坡もよく知りたれども。千篇一律。ありて見る人も厭ひ。自身もかもしろからぬゆゑ。かくの物せしなり。徠翁も其の意をよく知りたれども。吾が邦の文をよくする人もすくなく。かゝることはいかやういふても。人のうけると思ひて云ひ出だせるなるべし。或人傍ありて予が語を聞きて。もし此の人の文集をたづねば。記論あるも。概論あるもあるべしといひき。いかゝあらんか。王安石。よくかゝる説を出だして。醉白堂の韓白優劣論なりなどいひし事あり

一書札文字死活 書札の文字も死活あり。たとへば一筆啓上仕候より。御無事御堅固云々。私宅無恙。時候御自愛。猶期後音云々の。何事もなきよも。書くもかゝざるも。これぬ程の事なり。其の間。此間の寒氣の。弊郷の海濱。氷を見。或は半月一月の早なるよ。よそよの夕立すれども。こゝのふらすなどいふ。おなじ寒暄を叙ぶるよも。其の地の氣色もおもひやられて。書状の文字も活するなり。月日の末。此の書認めたる時。雨しきりふり。時鳥二聲三聲か。とづれぬなどかきたる。いよ／＼其の時。其の人のすがたもかゝる。様よてかもしろし。長さ三尋あまりある書札。よても死したるあり。三行四行の書。よても活きたるあり。これらの書札。かざらず。詩歌連俳。よて心づくべきことなるべし。

一平家物語、盛衰記 備中長尾村小野直吉よく書を読む。其の子本太郎もまた其の意を繼ぐ。其の説。平家物語の盛衰記より前。出でし者なり。羅山先生の説。筆室時長が作れる平家の。今の四十八卷の盛衰記なり。信濃前司行長が平家の。今の十二巻。よて。それの盛衰記中より擇びぬきたるなりとあれども。二書ともよ作者のさだかならむ。時代の。鎌倉將軍藤氏二代の中。よ作れるなるべし。源中納言の青侍の夢。平家の方

人し賜へる巖島明神を追ひたてゝ。八幡大菩薩の。日ごろ平家へあづけおき賜へる節
刀を。頼朝は賜はんと仰せければ。其の後の吾が孫はたび候へと。春日明神の仰せられ
しなどよても知るべし。藤原頼經關東下向なきさまよ。いかでかかやうの事書さも思
ひもせん。盛衰記より入道將軍頼經の子はあたれりとさへあり。もし親王將軍の時な
らば。天照大神又とりかへし賜ふなどあるべし。さて盛衰記の。其の後は平家物語と東
鑑とをあてせ作りたるものと見ゆ。既し源平と名づけたれば。源氏の事をよくしく
せんとして。大庭が早打の一段。東鑑をとり入れて。東國の軍を詳しせしなり。然れども
本の早打の處をも其のまゝよおきたれば。二重となりしなどよても。源平盛衰記の後
出なることいあきらけし云々

一月を見る説 友人橋本吉兵衛。名は祥。来り語る。人の月見るよ。人よよりて大小あ
り。おのれの徑二三寸のまろさ物と見しが。人よよりて徑六七尺よも見ゆるあり。六寸
許し見ゆるは。尋常の人の目なり。されば所謂ぬか星などい。おのれが目よ見えざる
べしといふ。人々皆試し事よや。予ははじめてきよぬ

一詩文名題

詩體明辯云く。樂府題を命ざる名稱一ならむ。蓋。自琴曲之外其放情

長言雜よして方なきを歌といふ。步驟弛聘。疏よして不滯を行といふ。これを無ぬるを
歌といふ。行と述事本末先後序あり。以其意を抽けるものを引といふ。高下長短委曲情
を盡して以て。其の微を道ふ者を曲といふ。吁嗟慨嘆悲憂深思以其辭を伸ぶるものを
吟といふ。其の辭を措の意に因るを詞といふ。其の篇命をるの意に本づき篇といふ。發
よ發し唱といふ。條理あるを調といふ。憤よして不怨を怨といふ。感じて言よ發するを
歎といふ。皆詩の變體よして。總べてこれを樂府と云ふ。歌行辭あり詞ある者。樂府よ載
する所の諸歌是なり。詞あり辭なき者あり。後人作る所の諸歌是なり。其の名多く樂と
府と同じくして吟といふ。詩といひ哀といひ列といふ。則樂府のいまだあらざる所な
り。蓋。事よつきて篇よ命を。既し治めざる古題を襲がせて。聲調亦復相遠し。乃詩の三
變也 以上漢語なりし
を今是を和解し かくの如くありといへども。後世よなりては。構思の時必しも何某ら
をわかたむ。詩成りて後よ題を命ざるのみ。擊壤集の古詩ことよ吟と命す

一詩文長短

饑蛟取渴虎五字よて。其の事の了然たるを賞す。然れども夜何如。其夜
未央。二十五聲愁點長。仙人掌上玉芙蓉の如き。みじかきことを長くいひて味多し。是等
の其の詩の體裁其の語の勢よもよりてみじかきを必とせざるなるべし

一鹽河侯 鹽河侯の水と魚とのたとへをいそん爲す。ふとおもひ付きたる名なるべし。魏文侯をらんといひ鹽河の官は侯と稱せらるる人あらんなどいふに笑ふべし。此の書の名字みな此の類なる。これ一人を當てんとするに別意ありや

一詩人の説 ある人もと七才子の詩を悦びしが。此の頃慷慨然として體を變じ。宋調を學ばんといふ。余云く。詩の妙處は宋を必とせむ。明を必とせむ。好處は明も宋もあり。魔處も亦然り。高青邱。李何。李于鱗がごときは。東坡。放翁も見せても。拙といひざるべし。明人一時宋をそしる。流俗も宋人オナしなどいふこと常言なれども。英雄人を欺く意多し。清の王漁洋。古來七言律の上手をかぞへて。宋は陸放翁。明は崆峒。滄溟。二李などいふこそ。平心の詞なるべけれ。今平心よて見れば。宋も明詩あり。明も宋詩あり。これ自ら見てみづからあるべきよや

一粟の大樹 備後の安田といふ所。粟の^{末垂}あだれたるあり。遠く見れば垂^{したれ}櫻のごとし。高さ一丈許よて。そたはり二畝許もあり。粟練多くつきて見事なりきとて。外埜淡右衛門。此の頃圖して歸り示す

一詩語は白字を交ふる説 詩語限あれば。間は字を挿し入れてよく通ざるあり。孔子の有物必有則よりはじまり。程明道の詩を説く。點綴して人を省悟せしむといふも其の法なり。徠翁又これよまたがひて詩をときて語句の間は白字をまじふ。近頃の僧大典。むかし僧何某か創法としてことごとくしくかきたるもをさなきや

一唐商遺物 京富小路竹屋町のあたりやらん。机。硯管やうのもの數品もたる家あり。是れむかし唐山の人年々來り。店をひらき物を賣り。歸る時の賣殘し。貨物を。其の町内は預け置くを例とす。一年かけて又來らむ。十年を経し故。有司へ伺ひければ。其の貨は一町として預りかくべきよし命ぜられ。巡檢使のたびごとく點檢せられしこと。四十年前までいしかありしよし。今はいかゞなりしか。其の頃の京南都へ來り。店出しせし唐人はいくたりもありきとなり

一天竺徳兵衛 徳兵衛といふは高砂の商よて。外國を廻り。天竺もゆきし故。罽舘とす。天竺よて釋伽の居まし。寺は遊び。礎のみ残りたるを見しこと。長崎夜話に見ゆ。近頃大坂よてアメリカ國の龜甲を見る。其の龜文この物と大同小異なり。凹き所の金色よして。全體この龜より丸くして過ならむ。これも徳兵衛。阿媽港よりどり歸りしものなりといふ

一 産醫可慎事

一 老醫の語次。鞆の浦の某難産にて。諸醫總婆等みな死胎なりといふ。産婦も亦しかいふより。せめて母をたすけんとして。鍛工を命じて引き出だす具を造らしむ。具すてよなりて引き出ださんとする時。俄に分娩して健なる男子なりき。今尚存在せり。又何某邑の何某の家。難産あり。是も諸老醫多くあつまり。死胎なりとて鉤をもて引き出だし。産聲たかくるしげに聞えて。死胎のあらむして。鉤の創痕より。血をたよりてやまず。二日を経て死したり。鞆の産のあれも與謀して引き出ださんとおもひたりきと語りぬ。かゝれば今の産醫妙術多しといへども。亦慎むべき處あるや

一 羞惡

文化三年三月妹なりけるたねが。京に行きし。一日因幡藥師の戲場を見る。一惡人出でて人を害するさま。あまりよく見えければ。棧敷をりたる一老人。舞臺へ飛び上り。其の役者を打たしめしかば。頓て人々取り押へて。老人をつれ歸りけるを見たりといふ。おもへば震初新志。其の事のごとき事あり。取りおさへたる人。あれと戯なりといひければ。其の人若真ならば我が刀を背せんといひき。何地もおなじく善を好み惡をよくむの懿徳の。おもてぬ處に發見すること。つねあることなり

なり

一 詩歌の語

此の頃雨ふりつゞきて暗る。期も見えむ。よりてふるま歌

「住吉の松の千歳もふるばうり久しくとまぬ五月雨の空
俳諧の發句」

「さみごきやある夜ひびくは松の月

などいふを思ひ出で。かくあまりよふりすぎ久しすぎたるも。興さめて見ゆるものなり。おもふついでよまた歌

「ながめじと思ひまて。もとよかく涙せきあへぬ秋の夕暮

これらも悲しすぎたり。春の曙に命をのむ。郭公を待ちていく夜もいねざりしなども。其の類にて。古人の上手よも此の類多けれども。余のこのまを

「有明のつれなく見えし別より曉ばかり憂きものぞねし

といふを古今第一とし。秦時明月漢時關。萬里長征人未還」といふを唐絶の壓巻などいふ。暇たかし。近頃小澤蘆庵のみ此の意を知れりと見ゆること多かり。諸尤といへる尼。夷講にて酒もりする處にて

「客をほるいと三筋やえびを講

九十八

といふほくしたりければ。一座興ありつれども。其のさま賤しければ。後悔またりとみづから語りき。かゝる體の俳諧の俗談平話といへるよさへいやしむを。近頃詩歌の人好みてこゝをせよして物するといふよぞや

一機巧

備前岡山の表具師幸吉といふもの。一鳩をとらへて其の身の輕重羽翼の長短を計り我が身のおもさをかけくらべて。自羽翼を製し。機を設けて胸前ちゆうぜんにて操り搏ちて飛行を。地より直に颯ることあたを。屋上よりとうちていづ。ある夜郊外をかけり廻りて。一所野宴するを下し視て。もしまれる人よやと近よりて見んとする。地は近づけば風力よわくなりて。思ひを落ちたりければ。その男女驚きさけびて遁れしりけるあと。酒肴さそひ残りたるを。幸吉あくまで飲みくひして。また飛びさらんとする。地よりいたち颯りがたきゆゑ。羽翼ををさめて歩して歸りける。後此の事あらえれ市尹の廳よび出だされ。人のせぬ事をする。なぐさみといへども一罪なりとて。兩翼をとりあげ。その住める巷を追放せられて。他の巷ようつしかへられける。一時の笑柄のみなりしかど。珍らしき事なればあるす。寛政の前のことなり

一子反酒疾

左傳の子反が酒をのむこと。かゝること人間はあるまじき事なるべし。予も酒の疾ありて。いろくの変態をしれども。凡世は心のなき人あらじ。子反酔いざればよき將よて。酔ふ時事を敗るゝ平生の事なるべし。陣じんは臨み敵てきは對して。かゝることあるべからず。かゝることある人なら。酔いざる時。よき將よてあらざるべし

凡。酒の疾酔ふて前後をわすれ。身をわするゝ多けれど。大酔の上の事よて。尋常じんじょうのあらじ。疲勞してまばらしくこれをもて氣を引きたてんとする。大酔して前後をわするゝも至ら。子反も中軍の大鼓と心つかひの多きと。まばらしく勞をたすくる心なるを。敗軍たいぐんとなりし故。人も奇きよ云ひつたへ。書しよも奇きよ書しよきしなるべし

一夜半鐘

夜半鐘のこと兵中のみありと云ふ説もあり。また。夜あけの鐘を夜半と認めしなどいふもあり。あけて後寺を見て。さては夜前やまへ聞ききし。あの寒山寺の鐘なりきといふ説もあり。李洞が月落長安半夜鐘といふを見れば。兵中のみあら。丘仲孚書をよむ。中宵の鐘を限とすといふも半夜なるべし。張繼が重泊楓橋詩も。烏啼月落寒山寺。支枕猶聞半夜鐘といふもありて。さだかなる。月落烏啼を。夜あけのけ

九十九

しほは見るゆゑよ。色々の誤解もいづくるなるべし

筆乃きさひ終

都は年ぬり

筆乃きさひ終

しきよ見るゆゑよ。色々の誤解もいづくるなるべし

石川雅望は江戸の人なりいまを距ること殆百三十年寶曆三年に生れたり字を子相といひ通稱を五郎兵衛と呼べり年少のころよりいまの日本橋區小傳馬町なる糠屋といふ旅店に傭われて居たりしが性来學問を好めりしかむ餘暇は當時流行せし狂歌戯文など心を寄せて大に其の技に熟達したりきかの宿屋の飯盛または六樹園などいふに即この人にして常は小島温及太田南畝などを朋とせり稍年長むる及び古屋普陽を師として専らわが國中古の文學を修め殊に萬代不朽の傑作ともいふべき源氏物語を愛して源註餘滴十二卷を著し或は批評し或は註釋を加へて世に公にしたりまた好みて擬古文を書き一字一句といへども其の出處の明ならぬもの力めてこれを避けたりとぞその當時を不存せる氏の著書を見ても知るべし文化の末故ありて四谷に移り居しより専ら身を文筆の業に委ね終始靜慮。真顔。季鷹など交際して共に狂歌戯文をもて其の名高かりしかば晩年よりいたりて宗匠の號を賜へり法眼に任せられぬされど氏に決して當時のいふゆる狂歌師或は戯文の作者など同一視せらるべきものあらざるべし著書數十種あり其のうち最良なるもの雅言集覽なりこの書の全部三十五卷の大著述にして一萬餘の古言を

蒐めこれに解釋を附して例を擧げたるものなり其國文學に効勞ある決して尠少に
あらむといふべし文政十三年三月靈岸島湊町にて歿したり年七十八嗚呼氏の如き
の眞一の文學者たるに恥ぢむといふべく而も其の境遇と勉勵との誠は後生の龜
鑑となす足らん

都の手ぶりのはしがき

赤駒のはらむゆゑも都おしつゝ、こゝらの世々を
へぬるまよゝ。其手ぶりのうつりかはれる事おん
さひかりける。此書は石川雅望のてぶりをひとつ
ふたつかいつけたるが。かくいふれるあり。其書ける
事は。さとし事おがら。詞のみやびごとよとりおせり。
うもゝ。いよしへと今と。手ぶりのうつりもてゆく
ごとく。ことばもはたかひりゆくものおれば。今のこ
とをいよしへぶりよかゝん。いとかたきことよし
て。石上^{SHIMAZU}ふりよし書ら。よく見わたしてわがものとせ
ざれば。かくいふしがたきわざかじ。たひぶれごと
かける。おもふこゝろありてあるべし。見むひと心

あらさん。此はしよいさゝかかいつけてよとあよ
しがこふまゝよかくあむ

橋 千 蔭

都 の 手 ぶ り

石 川 雅 望 著

大江戸のうちよ。とみざのといへるまちあり。朝市とかいひて。そこよあるあきびとのか
ざり。^{未明}つとめてより起まいで。かどのとよむしろまき護けて。ふるま帯なえびめる衣な
ど。いくらともなくつみならべてあきなふ。あけとなるころより。かしましきまで人
つどひきたりて。おのが欲しとおもふ物をもとめつゝいぬ。あたらまげなる。ふつよな
くて。くれなるのうらゑらめるもの。むらさきのとえおくれたるたぐひのみぞあめる。あ
るの解衣の亂れたる。藤衣のまどほなる。^{間遠}あらぬひの筑紫のわた。河内女の手ぞめのいと。
みちのくの志のぶざり。いせをの蛋の志ほごろもなどさへこくら見ゆ。そも山吹の花
ろ衣。ぬしのたれとも問ひあるべき。又あきざいろのもめんといふものよ。花橋をそめつ
けたるも。こちなげよて。ことさらよむかしの袖の香なづかしたもおほえむ。その中よ。た
もとゆたかなるから衣の。たがうれまきをつゝみたらむ。むねあひがたきほそ布の。もの
おもふ人やまならしけん。麻衣の肩のまよひたるに。ひさきもりのけのころもならし。

花田の帯のなか絶えたる。石川のこまうどのとますてしなごりなるべし。うすもの
 ひとへを見て。すべり出でしうつせみの心用意まらびをおもひ。緋袴のあつごえたるを
 見て。さむきをあわれみし范叔がむかしも志のむる。纏袴のやぶれたるが。狐貉のかひ
 ぎぬの中よまじられど。とむり帳のあかつきたるよ。むこの大君もよげめや。つかふ
 べき法師のかくる袈裟よあまたところひきやりしあともゆる。西寺の鼠のくひたる
 やらむ。琵琶の緒よしらわた。ゆといひけんこと。うちつけよ亡き人の記念かたみよやと。あい
 なき衣さへまじりてあり。また今様のゆかたびらよ。藍もてさまぐのかたをめたるな
 ど。ひとつぐよあげいんもあづらにしければもらしつ。を男のこの禮服とすなる物の
 中よ。うへのきぬの袖を切りて。上下と名づけたるものあり。これよつぎて。ふみこみ。こ
 ちよ。もよひきなどいへるもの。あがりてのよ人見もあらぬ物なるべし。かゝるくさ
 ぐのふる物をあつめて。馬よおかせ。船よつみなどして。こ越しの國。みちのくのこてま
 でももて行きて驚きうり。それよりえぞが千島の遠き境よもゆきわたることよぞきく。
 かゝるもの。もと。たづ使なきわび人の。あしたゆふべのけぶりたてかねて。せんまを
 きまよ。たくいへたる衣とうて。あ取しいくら。こがねいくらとてお除ぎのりかりつるを。ハ

月のほどは購ひえざれむ。さだまれる事よて。ものかす人のこゝろよまかせて。かゝる所
 ようりわたしぬることよぞ。まべて新しきよくらぶれば。ふるもの價いやし。されど
 よろしき人の。これを求めかゝんや。かふもの。うしなひし人。ともよまたわび人なれ
 ば。かゝる市のよごのしきこそ。世よ貧しき人の絶えざるあるしなれとおもへば。例の
 もろき涙のほろく。とこぼれいづるを。あしたの露よかこちなしつ。なく音かなまき
 ちどりの橋をうちわたりて。かしこへいそぎぬ

兩國の橋

大江戸より本所へわたしたる橋を兩國の橋とよぶ。いよまへ。この川よりを彼方ち下も
 つ總ふきの國なりければ。まかなづけたりとあるひといひき。在五中將のとほくもきよけ
 るかなとわび給ひしすまた川の。此かみつ瀬よして。淺草なる大ひきもこのながれより
 どりあげ奉りけるとぞ。ふじのねのさらなり。ますかげのなしとよめるつくもの山も。
 手よせるばかり見ゆ。そこらゆきか舟のおほかる。たゞ柳の葉をこきちらしたるが
 ごとし。夏のころ。ことよ舟あまたつどひて。いと竹の音。川波よひききけひておそろし
 きまで聞ゆ。げよひろき都の中よも。なぞらふべき所だもなく。こ無此上よなうよごのまきわた

りよなむ。川づらよ。霞を仰みてへたての垣となし。すのこたづ物何またならべて。い
 こふ人ごとよ茶をもて何きなふゆり。又おなじつらなる假家つくりて。小弓の射場まう
 けていとなみとするものもあり。髪つがぬる家。舟かす家。もちひ。くだもの。酒うる軒な
 ど。所せまてたちならびたり。まべて名高き何さびとの家々の。かぞへつくすべうも何
 らねむ。うちおきていねむ。此大路の中よ。こもすだれかけ。假家つくりて。どの方よあや
 しみ繪をかきてかゝげたるあり。肩ぬきたる男の。とぐちよ立ちて。口よ手をあて。聲た
 かくよむひいへる。この丹波の國なるかく山よてとらへつる。山あらしてふけものな
 り。世よ稀有の物なり。前代未聞。又たぐひあらじ。家づとよよき物語のたねぞ。見たらん
 後よ。錢おこせねと聲かるよばかりのよあるさま。むさびの大きなるをどらへて。斯
 う誇らまげよいふなりけり。その隣も同じすぢなる假家つくりて。うすぎぬかつぎた
 る女子を。たかき所よすゑて。うしろよ。まろきあをさ紙をへだてとりたるあかり障子
 をたてつ。副ひ居たる男の。扇さかさまよとりて。まづおのぶきをささよたて。見る人よ
 むかひていへらく。此女子こそ。この國なよがしの村なる狩人の子なれ。殺生の罪の子
 よむくい侍りて。斯うあやしき身と生れよたり。さればとをがびとつ罪障のさえうせ

なんよすがどもなれとて。こたびぬてきて。あまねく人々よ見せ奉るなりとて。かのうす
 ぎぬをとりのけつれば。げよいひしよたがね。顔より手足までひとつらよくろき毛お
 ひつぎきて。目鼻のつきどころさへわかたぬ。熊女となづけつるもことわりよこそと。人
 々うちまもりあざむ。かゝるかたのよさへ生れよたるを。かゝるかしう人あつめて見す
 ることよ。かの女いかよわびしとやおもふらん。なが名いひじとうちたぬぶれていで
 ぬ。むかひなる家の。ことよ人おほくあつまりをり。こよの女子を六七人あつめて。ふこ
 といへる今様のうたひものをうたひす。このあだくまき男女の。みそかことせるがあ
 らられて。せんすべなくかたみよ死なんと契りかたらひしことなどあるを。かゝるふし
 物よあやなしとなり。此頃世の中ゆすりてもてあそび興すれば。さてこよも。かうい設
 け出でたるなりけり。げよよごもりたる人などのかうさまの事よ耳馴れゆかば。じねん
 よあだなるまきみよ心やひかれむ。女子よのまかまべきものともおぼえむ。又たかきあ
 ぐらよのぼりあて。文机のうへよのうまぎのかたしを置き。ふるま世の軍物がたりを
 まねびいふ。まことよや。偽よや。おのがめよ見しごとかたりなまもれかし。かたつかたよ
 人あまたつどひたてる所あり。何ぞとよりてのぞけば。くろき管ふたつならべ。これよれ

ほきなる太刀ふたつをかけ置きつ。わかき男の裾ひきあげて禱ゆひたるが。たかあしだ
 ときてついかさねのやうなる物。ふたつかさねたる上りのりて。この太刀をひきぬき。さ
 まぐようちふりて。とみは鞆をさめなどを。むさと見えたる男。これもたすきひきゆ
 ひて。これにいままきこしみじかき刀をぬぎて。ぬしとうちあふまねをま。さてかの人のい
 へる。かゝる太刀うちのわざら。たゞもろびとのめをよろこむしめんわざなり。まこ
 と。あが家のいとなみ。薬ひさぐわざらこそあれとて。さゝやかなる紙つゝみふたつと
 うで。此ひとつは足とらむといひて。家は傳へたるらうやくなり。あだそら。あくたのや
 まひ。ある。尻より口よりこくやまひ。舟やまひ。酒やまひ。いづれもちひても。とみは
 志るしあり。又こなたなる。齒をみがく薬なり。このくまり。むしかめむをいやし。口の
 うちのくさきかを除く。ををろくせんこと。ことよきみやかなりなどいひつゝ。せに
 ひとつを。かの薬もてみがく。十日の月の雲間をいづるがごとりかやまきて見ゆ。み
 な人れのがじもとめつゝいぬ。こなたなる葎のかこひの中。かゝるの頭巾きさる
 が。扇をえりのあさりよさして。上中まもの人のうへを。れもしろくまねびかたる。うし
 ろの方。わかき女三四人ならびあてかいひきうふ。とむかりありてせよもとむとて。

ひきさし立ちて。ちひさきこを人のむなぢのあたりへもてきてふりうごかす。つれなし
 づくりて。錢もやらで出てゆく人あるを。かのかゝる見て。權兵衛のそうきなし。ま
 さなうもうしろを見せ給ふか。馬かへされよ。をうくとよぶ。皆ひとわらふ。さてかゝ
 みあるせよかぞへ見て。あなうれし。もむかりあつまりて侍り。いみじき御惠よなんな
 どいひて。かけたる錢ひとつとて。これ御覽せさせ給へ。なからばかりよなりよとり。
 物をしもし給へる人の。かゝる物とうで。とびぬ。これもて歸りていもじよあつらへな
 む。六七文のせよやつひやさん。あなやうなしなどいひてとりかくしつ。さてもままか
 もなきさん達のみかげよよりて。うゑすさむからむ。世をいとなみ侍り。常もめこなるも
 のををしへいさめていへらく。かならず殿ごらの御惠をあだよなれもひそ。ひとへは親
 とこのみ奉れとこそいひつけ侍しか。ようれもへば。れのれが親ときこえ奉るから。君
 ぬちの爲よ。れのれの子よ侍り。さばかりよき子をもたせ給ひて。世のまこえめいぼく
 やれいをらんなどいへば。人また例のまよみわらふことかざりなし。さてそこを出で、
 さまよひありく。佐々木の家の暮じるしかとれもふばかりなる紋つけたる軒あり。薬
 ひさぐよ。長命帆ばしらなど。金字よ。だみたるふだをかけたたり。長命とは不死のくすり

なるべし。ほむしらすの何ならん。もしく風の薬をいへるなぞくまや。かゝるむづか
 しげなる薬さへ。そのころえてかふ人のあれむこそ。なりとひとなして世をわたるな
 めれ。といとれかし。又。人形をかしらより手足まであまたの糸もてつけて。うたひもの
 あはせて。いと引きあやどりつかふを。南京のあやづりとなづけて。むかしよりこゝよて
 れこなふ。をさなきもの。皆これよ心よせつ。つどひよるめり。柳の橋のかたよそひ
 て。ことよたかやかよ假家つくりたるあり。京くだり某の大夫と。いかめしく旗よ書きた
 り。これも。どの方よ繪をあまた書きてかゝげ置きつ。入りて見れむ。袴をぬきて上ばかり
 きたるもの。三人むかり。笛つゞみうちそやす。耳もとよいさゝか鬢の髪のことして。か
 しらなごりなうそりまてたる翁の。ねなじごと。上ばかりきたるが。見る人よむかひて
 れむみさへづりいふ。かの大夫。頭よそちまきといふもの。うしろさまよむすびて。手足み
 なあかき縮よれしつゝみて。半臂のやうなる物著て出できたり。見る人よむかひて。ひざ
 まつき拜して。さて太く長き竹の。三丈ばかりもやあらんとみるを。中よたてゝあるよ。す
 らくとのぼりて。竹のうらよ身をとめて。扇とうでゝうちあふぎたるさま。いとやす
 げあり。竹の右ひだりよなびきて。いまや落ちなんと見る人。こゝろをのゝきめくれてあ

やぶみれもふよ。竹をひぎよからみて居るさま。常の人の地よ坐したらんごとし。さて或
 りたち。或いふし。あふぎてまひ。そむたちてをどる。そのさまひとかたならぬ。これよさ
 まぐの名あり。かの翁。笛つゞみよあはせてゆびさしいふ。その曲の名は

- だるま 大師の坐禪乃ゆり
- 野中にてたたるひともと恋
- からまゝの洞のいでいり
- 東 山 乃 大 の 字
- 棺 つ さ ふ さ る ま ろ
- 餌落しとるやまがら
- すまの江乃そりとし
- 松よとひとる藤波

猶こゝらあめり。さてながく引きてへたるつなの上を。傘さしてわたる。なかき紙の上を
 もわたるよ。みな足ぶみををうしよあはせてをどる。見る人あざみ興ぜざるななし。こと
 えてぬれば。またゝかよ大鼓うちならして。もと見し人のかそりねとよぶ。やりとひとつ

あけて人いだすよ。おしあひて出でもやられぬ。ほとく^殆まりなる人よあか^輝りもふま
れつべし。むかひなる川づらよ。水よひたりて十餘人ばかり。聲そろへて何ごとよかあ
らん。高らかよ習ふ。このおもき^{病者}づらぎを救へんとて。垢離^{こり}といふことおこなひて。さがみ
の園なるあふり山の不動尊よねぎ^願いのるなりけり。手ごとよわらまへをもちて川よな
げうつ。流るゝをよしとし。たよふをあしとすとなん。たとてぬれぬ。おのがじよ衣ま
さわぐよ。猶若きもの。こなたかなたた^光よひ。かづ^潜ぎいで遊ぶも。いとあやふし。す
べてこの橋の前うしろよ。ひまもなくあきびとの家立ちこみて。大君まませとよむへ
る軒よ。あてびきたをかきらく^{あう}。あれもの申すといひたる家よ。夏やせよよま
うなぎもありぬべし。あるは虎てふ神を木もてつくりす。又あらたまを障子よゑがま
て。とのくちよ立てたるもあり。いからしとなるもの。家よさしむかひて。やれたる芭
蕉を壁よゑがきたる。つきく^{しう}みゆれど。おぼろといへる豆腐をひさぎて。あかし
と名のりたる。いかよぞや。此ほか。もち^餅ひを幾世の名よおとぶき。せんべを羽衣の松よ
なぞらふなど。とりいで^{乳母}かぞへいそんも。このもたるまじうぞおほゆる。かゝるあた
りをへめぐらひて。ま^{乳母}と共よあそびさまよひしも。こや四十とせのむかしとぞなりよ

たる。げよとしつきのながれとやま。この川の瀬よおとらざること。夢のわたりのうま
こしをわたりくらべし人のあるべきよこそ

馬喰
むくろのまち

大君の神よしませ。水鳥の。すだくみぬまを都となしつ^上と^世あかりたるよよみたり
けん。げよ野中ふるみちあらたまりて。いまだ都とをなれる中よ。くらかけの橋の左右
の。なべて人やどす家たちつぎきて。いとく^よぎそよまき所よなむ。このあたり。むか
しの海よつぎける入江の沼なりとか。いまにさるおもうげだよのころを。橋より北さま
をむくろのまちとよべり。そのかみの。ふりたる寺ならびありて。さびまき草のそらよし
て。橋の南の六本木とて。中つ世のうま^驛やちとぞ。今のこてま^{小俣馬}の三のまちとぞいふなる。元
祿のころほひまで。人やどす家ども。此三のまちよそづかよ十ばかりありしを。おなじ
六年といへるよ。信濃國なる善光寺の御佛^{みほとけ}をもてきたり奉りて。本所なる回向院よてを
がませしよ。世の中ゆすりて。これよまうづる人おほく。とほきおなかのうむおきなまで
敷あらむつどひきて。このやどりよあまうつ。夜も大路よむしろ敷きてぞあかしけ
る。この北より。かゝるなりとひするもの。やゝ敷まさりて。つひよむくろの町のあたりま

で住みわたり。いとなみするところなりぬ。いまの人。これをたごやとよぶ。そもたご
 とい。まぐさ入るゝかたみ籠。あるは旅ゆく人のもてること籠などの名なりけるを。いかなる故
 ありて。斯ういよびつけたるよか。家あるのさま。門ごとよ。あるはの名を志るしつけたる札
 をかけ。あかり障子よも筆ぶとよ。おなじことかきたり。ま様のこの下よとさすてたるわら
 ぐつ。うらなしなどいくらともなくかさなり。あるはやとぎの市もかうぞなどおぼゆ。あ
 るじよや。まも男よや。町の辻よたゝをみ居りて。旅人の過ぐるを待ちつけて。やどりと
 り給ふやなどひきく。まりたるやどり有り。かしこへなどいへど。猶追ひきて。かしこ廣
 まひろけれど。人あこみて所せう侍り。わが家小。さゝやかなれど。あひやどりの人もなし。
 たゝみ。よるの物も。みなまよらよまおきて侍るなど。さまぐよこしらへいふ。とじめい
 いなみぬる人も。まかしせめらるゝよまよびて。まぶくよかれよ引かれつゝゆくもお
 かし。軒のとしよ。すが笠たかくかけおきたるは。おくらかしたる友をまつまじるしとぞ
 見えし。これらに。みな伊勢の濱萩をりふせてたびねせむといでたちし。神まうでの人よ
 ぞありける。湯あびんとよや。こだかつる鶴とぎよて。三四人ひきつれて。湯屋たづねさまよ
 ふもおかし。まべてあまざかるひな人よしあれば。家は有りては。粟ひえなどをのみくひも

のといすめり。さるを。よくまらげたるよねのいひ。けよもりてくふ。椎の葉よもるとよ
 みしよに。さまかこれる旅のやどりなり。興まりたるかたよをるは京人よや。ながき旅路
 よいろにくろみたれど。さすがよそのき分際みえて。なだらかよもてなしつゝ。日記のやう
 なるものとうでゝよみなどす。旅い染いもこそなどうちを誦しぬるもゆかしげなり。とのか
 たよ。女どち七八人。老いたるわかきうちまじりて。足ひきながら入りきぬ。あるじいつこ
 よりぞととへむ。こよろぎの磯ちかきわたりより應いらふ。さらばみさかなとりよわか
 めかりあけてんとたつを。さる物のねぞ侍らむ。玉だれの中のかしこし。人げとうくだよ
 あらば。こもすだれのなかよす給ひてもと。うちわらひていふ。おなかびたれどさすが
 よつゝましううちまのびて。だ迂みたる聲人よまかせじとよや。ことをくなよもてなしつ
 づ。さし出でたるたらひよ足さしいれてあらふ。調度めく物につゝみよつゝみて馬よお
 とせつるを。従者をさ從者いこれよのりておくれきつ。何ごとよかあらん。おりさまよ馬ひきたる
 男とあらそひてのゝりさま年長ぐ。わかき人のあきれて手まどひしつゝ。みなよげていり
 ぬ。めのとよや。おとなしき女のいできて。まさが手をとらへて。人あろし。物ないひそと
 せいして。おくさまへ率率てゆく。都人のおもひいせんもそづかし。たびの空よて。かゝる心

いつかふものか。ようせむばかの男ようたれやせまし。あさましとて。くちくむさをあ
 つかせむ。くち^口附^附の男。あしおもふさまよ得て^五咲みまげて馬ひきてかへる。うしろで
 もよくしや。ひとまなるかたよ。ひげおひこえてまふしつへたましき男。ひとりもろ手
 くみ。かしらうちかたむけて。かべよむかひをり。とねむがたりするをさけば。たのれもと
 より家とほくして。さきよ隣なる主よこゝらのこがねかり出でたれど。たゞ朝霜のひよ
 むかひたるやうよ。時の間ようせよたり。返すべき期もよくしりぬれど。もたらねむいか
 よせむ。たゞかの人の死よもやすると。そかなきあいなだのみよひきしろひて。としごろ^年
 を過しきぬ。さるを。こたびむら^村をさのあつかひ物すとて。いたくたのれをせめさいなみ^貴
 て。ことしのほどよ。此こがねのこりなく返しやりねといひねきてたるぞことわりなき。
 此こがね。もと。むらをさのかしあたへつるよもあらぬを。しかむかりたらちいふなる
 いかなることよか。むらをさもしめぐみのこゝろあらば。隣の人をいさめて。もよとせ
 ちとせすぎんまでも。なだらかよ待ちてあれとこそいふべけれ。なき物つくなへとせめ
 いへる。あまごぜよむかひて。ふぐりいだせといえんよことならむと。かしらうちふ
 りつゝつぶやく。たかどのゝかたよ。がや〜と人の聲する。ここの國人なるべし。三四

人つどひて酒のみあそびて。いたくそひやすみけん。からき聲まほり出でようたふ。そ
 れがなかよ。あかき男のたちあがり。扇とりてすゞりもじりまひをどる。そのうたい。かし
 この國ぶりなりけり

酒を〜うべつ 五さくのさけを

一合〜うべつ 五ひいやましぬ

などうさふ。猶あかきや。皆立ちてまふ

盆の十三日よ 舞人のそろひつ

稻のほよりも いとよく揃ひつ

拍子
 とうしとるさびよ。やとせのせと。うちをやしつゝ。手うつさまひなびる物から。見しら
 ぬめよぬめづらしく。さよう有りてれかし。こなたよなみあてゆふげくふ人の。しなの
 國の人とか。大きなるまりよいひさかう盛りさる。さながら越のしら山ををしきのうへ^勝
 ようつしすゑなるやうなり。あつものゝ汁ひとくちよすゝりてあせの魚。かしらも骨
 ものこりなくひつくしつ。さていへらく。そらをそこなひて。日ごろよなり侍る。こゝち
 あしければ。じねんよいひとむもりまくもあらむ。今宵たゞまりよいつゝむかりを〜う^統

べぬ。かむかりよてのいとこゝろぼそしやとて。ふしめよなりていふ。かゝる人のこゝろ
 ゆくむかりものせむいかむかりのいひをやくとまし。いとれそろし。へてたる障子の
 あなごよをる。衣手の常陸人あり。うちゆがみなる聲してきへつりいへる。今晚な。
 いさくこうじ^四たり。なでふよもかであにも。すねいさくして動くべうもあらざ。うちそべ
 りて聞えん。ゆるくめせとて。としがまよよりてふしつ。とむかり有りて。ついにきあがり
 て。めを大きよなして。いかづちの落ちかゝるばかりの聲して。だいじをなんすれよ
 る。其のすくよていこ^宿ひしとき。うるまのいも答ふつづもとめてくひたりき。その
 れのれぜよをかへたきつ。まうく^休とれこしめせといふく。ねたる人をきへたこす。あ
 すこそ物せめ。ねむさきよとあぶれど。えしもゆるさで。うちこなるもなきけなげなり。ほ
 どなく無縁寺のかねきこゆる。或の時や。れのく^互うちやすみさりけん。れとせむな
 りぬ。つかれしひるのなごり。夜ひとよ大どれる聲して。ねごとくかかたみよのしる
 もけうとく。例のあなかしかましと聞きつるかべの中なるきりく^互すさへ。けれされ
 るよや。音とてぬやうなり。あくればあさげとくしよめて。たのがじしこころく^互よゆ
 さわかるゆり。げよいづれかきしてとれもふよも。旅むかりあそれよれかきき物のま
 へ

あらじや。もろこし人の詞は天地の旅のやどりなり。ゆきかふ月日ゆびよのごと
 じといへり。されむ生れようまれある人。ぬれかんとこしなへよ此やどりよとままりを
 らん。浮生の夢は似たり。ようなきたからよ心をかけて。草まくらたびねのまどよりうか
 びたる。雲をのぞまん。いとく^互れろかなる心よこそと。その夜やどりし山ぶし法師の。
 うちひそみつゝかたりたるをきよて。ふうき心のゆきよしらしらねど。げよとめさむる
 こゝちこそせられしう

やくし堂

いづこもねなむなどつづけたりし。かあ山寺のかご^静なる所よて。こそよみあめれ。玉
 しける都のうち。なべて所せう人のゆきうひよぎとしようて。秋とだよしらぬ人もねほ
 ური。女どちのをりよあひたるいろのあやうすもの。たのうじしすきごゝろよまうせて
 さうそきつ。男がたもいまやうのひとへ夜うるのしうきなし。扇とりて夕暮おそしと
 待ちとりつゝいでたつ。しもつかたのとりあへたるまゝのゆかたびらよ。帯しどけなげ
 よひきむすび。老いたるわかきうちまじりて。道さりあへぬまでおしあひつゝゆく。なよ
 しまかうのとおもひめぐらすよ鑑のあたりちかき所よおとす。薬師佛をがまんとして行

まつどふなりけり。人ごとよいさき立ちて。そらろよかもひなげなるおもちなれば。ありわづらふ人としも見えぬを。さる御佛たのみて何事のいのりするよかとおかし。こゝは海賊の橋といふあり。貫之よ見せましかばあたりもてをよげなましとおかし。されどしづけき御代とていさゝかの白賊なみだよたちわたらぬぞたふとさや。橋より南ざまよ折れゆけば。いづこの野山よりうもてきよけん。さまぐの本草数しらをならべおきてあきなふ。許多こゝらある中よも尤日を待ちあへて咲き出でたるさくのとをうち見るより。老もあすれつべきこゝちぞする。また夏よおくれ咲きいでたるも猶おほかり。くさ紫の香桔梗杖龍膽紫紫死紫。かうさちかう。りうたむ。しをよ。くたよ。さうびなどいづれかまさりおとりやある。されど昔より物の名よのみいひつけつ。そのさまをけせうよよみいでぬぞほいなさ。かさかぞふればなぐさの花ぞことよみどころにおほき。藤むかまのよほひ。たちあがりたるの。常さまの花よも似む。たが佩ものよやすらんといとゆかし。あるのふるえよさける萩の花。もとのこゝろのかうもあらまほしとおもてる。また朝がほをねごめようつして。さかりひさしかれなどいふも。とりぐよおかし。たかやかよささみだれたる女郎花を人々つどひつゝさそひ買ふ。あなかしかましとひとりあみぞせらる。姫ゆりなで

しこなどい。人めきたる名なるを。いぬたで。ゑのこ草としもなづけたるのいかよおもひくだしたるよや。鳳仙花。鶏頭草などの名のみよしもあらむ。かたちさへこの國の物とおぼえむ。そも秋このむ宮の御まへいかなりけむ。遍昭が庭のつくりざまいふよもたらじ。さがの大井のあたり。いまだ行きいたらざればしらむ。あたりちかき。むさしの原といふとも。げよけおされつべき秋のいろなり。うしろの方よ大なる松をねこじきたるが。さかしらよ高砂の松と書きてさげたり。今日しもしらぬ人よ引きとられて。たれをかもしる人よとあかし。そのほか竹かへひらきなどとき木のかざりならべ置きたる。やうくさまぐよていくそたびみめぐらふもあかぬこちす。又かたへよちひさきこをいろどり。それよくさまぐの蟲をいれてうる。いなごまる。とたぐ。まつむしすむし。猶こゝらの蟲あめる。ひとしくさそひなく。すゝしもてそれる箱よ。螢あまたあつめたるをみて。いろごのみの家のすさみもかゝりけむ。から國のなよがしが窓やいかなりしなどいふもあり。むしのしやしりよひのつきてと。のしりとほるのよからぬ人よそこおしよからるれ。とかくするほどよ日もくれぬ。いそぎ御堂よまうで。ねんごろよふしをがみておりつ。御くるまちかきあたりよて。この御佛を置き奉りて。薬研堀

といふ所また、世おとす不動尊。さていじろがねのまちよまします観世音。この三とこ
ろぞまありつどふ人もおほく。またうゑものなどあきなふ人も。共よひとしくおほゆる。
げよそるかなる野山の草木をひとつ所よあつめみむ。人の國よていいともかたき
事なるを何ごとよつけても。ことたらひぬる都のさまぞかたじけなきわぎよある

よたか

沖つ舟よるべきためぬをうかれゆとよび。家よありてまらうどをまつをばくつとど
よびつけたる。これいさるたぐひよのさまかりて。家よしもあらむ。舟よしもをらむ。た
る大路のくまぐあやしき木のもとなどをたづねもとめて。しむしのねやといさだむ
るよなむ。京よよはよのさうかといひ。あづまのかたよていよたかとぞよなる。さるい。
ひるいふし夜の行きて鳴くとかいへる。ふるさぶみのこころもて。なづけそめたりけむ。
日いるころよりよそほひこちたく物して。かこへていそぐ。むかしいもめんのくろ
きを衣としまろきを帯となして。かしらをばたのごひよつみみていでたちしを。今様の
さるまねびをもせ帯さまの市人のめのごとく見まがへありく。わかきいまれよて四
十より五六十むかりのふるおうなをおほかる。みつらむまで老よける身をひさかく

さんとよや。ひたひ髪ぬけ落ちたるをむ墨をもてそめかくし。しろき髪をばく落さあ
ぶらしたくかよしてぬりかくしつ。されどえしもかくしおほせてし落さがたらよま
じり出でたる。みぐるしうきたなげなり。げよ雪のかしらよつもりぬるさへ。あとつけま
うさ色ぞしたる。暮してぬれむ。例の所よ立ちてゆきかふ人をよぶめり。つれなく過き行
く人もあり。またちかくよりきて。ひたぐとかほをまもりみるもあり。そじめよりこれ
をむねとおもふ人の。こゝかしたちもとほらで。たうちよそしりきて。興さまへいるを。
やがて女もつゞまていいる。ふしど見えし所のこもすだれかけたれむ。ゆふづく夜のさ
だかあらぬよ。あらぬよしも見えむ。さるは。秋ならむとも。露けからまことれほゆ。す
そたかくかゝげて小太刀さしたる男のよくい顔したるが。なよゝかきけん。馬つからし
よとうめきて。すこく歸りいぬる。おもへる人はあぬよやあらん。またやせさらば
ひて杖よすがりたる老法師の。あなぐく見めぐりありく。かくてもすぐさざりける
よとおかし。古むくちのうちほうけたるよやあらん。あかつきたる夜きて。みるのごとく
帯よたのごひさしそさき。木履よきたるが女のもとよよりきて。うちさくやほていふ。此
ごろ錢といふ物よくまされて。こしほも類のいよとち。引さかへんはあすまたよなし。さ

るから日頃経れど米をなりぬ。人のつてよきけむ某殿のむきこそよがれせを米かよふなれ。つらつさをくらべ見むよ。おのれいかでかれよおとらんや。あ女。人あきして。錢あるかたよ心よせて。人をとちふくこそよくけれ。といへむ。く何ごとをいふ。そのの身の草の原ある屍ぞ。からまのまてついなみちらすを。いかですまふべきといふ。男さあいひそ。ましかめつる戀の奴の。いましもまてつかみかゝりなん。待ちてあれ。さこそころもとなからめなといひをり。又かたつかたよ。人たちこみてがや〜とさへづりいふ。こよの女もなきを。いかよかくつどふよかとおもふよ。かくれの方より。たのこひよつらをかくしたる男の。としりいできてたちこみたる人をおしわけついでゆくを。人々見おくりて。あやつ。あめのまたのいろごのみよ。あたら男のかゝるものよ身をたふらすことよ。ひるならましかむおもてをも見まし。あないさんなどとしりいふ。かの男のあらむがほつくりて。耳よもかけむ。いづくへかこそ〜とよげて行きぬ。やがておくまりたる方より女いてきて。かのあつまれる人をもものしとせむ。そこよ立ちゐて猶人によぶ。あながれたるがすこしとな聲なるや。やまひつきたる女とぞしらる。そこよある人。あおけしからむ。ま〜くちつさ。あら海よすむあよのかほこそかくれ。されど物おも

ひやすらん。鼻さへおほぞらをおふぎてをりなといへ。うしろなる人。そやつ。よも女よのあらじ。文珠ぼさちののり物よなど。さま〜くげなることいひまろふ。まうといへるもの。かの女をらをおてきて。かへきの道をもともなひゆくものとぞ。あまりよかしかまじきよいできて。かゝるむざもけふのけぶりたつるなりとひよて侍り。いとなみのさまたけなし給ひそとせいす。ことわりよやをれけん。おの〜とよみて右ひだりへあかれつゝゆく。その中よ大どれたる聲して

もろこしの 虎てふ神の ちさとなる
 やぶさへとじる などやこの さうじひとへの
 まゝならぬ あれれありなの こゝろいられや
 とりたひつゝゆく。又ひとりが

あがせこが いぎなひゆかば いかならん
 さとへもゆかな めてゆかせ かくあらませ
 ちのみの ちのやいさめん そゝそとの
 母やなげかん かよかくよ せんすべしらよ

いさつくを　　せながいへらく　　あきどりの
あさたつがごと　　ぬてゆかを　　なよかものもふ
あかむかひり　　こころよわくて　　よけくやのある

とうちゆがみたる聲を艶よきかせんとて。たかくひさくまざらぬしつゝうたふめり。市
ちかきあたりなれば。めくら法師の笛吹きならしてお足まぬらんなどいひありく。あち
つなしなどすしよつくりたるをもうりもてゆく。またこよやくをゆでゝみそつけたる
を。鹽梅よしやなどよびて行くもあり。物さわがしけれど。さすがは夜よ入りしけよや。川
浪の音まづかよきこえ。岸の柳のそよとなびくさへうちくもりたる夜ながら。いとまろ
くしらる。市の中よの橋などわうゑぬを。いつこよやどらんとか。ほとゝぎす。なきてわ
たる。されどさゝいるゝ人だよなきぞあたらしき一聲なる。此さまよりくるをのこあり。
聲たかやかようちあげつゝ。いまこそなのれ。某こそ平氏のつとももの。七兵衛のどう景
清なれ。保童の君をかしづきたてまつり。なき君たちのむくいせんと。かたちをやつし隠
ろへこしを。まげたゝがためよ見あらぬされつる念なきよ。よしゝ。さらば日をすごさ
をいくさをおこし。かまくらへおしよせ。かたさのやつばらみなごぼしよせむを。汝重忠

かしらをあらひてまちてまれと。いさほひ猛よさけびいへる。わがをきの家よ親とす
なる。市川排優のなよがしがこわ音をまねび出でたるなりけり。門もりのとうまざうちま
るの攻よなれるなるべし。かの女ばらおのがじゝさうどき。帯ひきゆひ。もすそ鶴とぎよ
ひきからげて。かたみよ名をよびかこしつゝ。十餘人ばかりひとつらよなりて。やどりへ
といぞぐ。道すがら大きな聲してうたうたひ。聞もたらぬ物語まつゝゆくさま。つゆ。女
まき所ぞなき。あるゆいさかひそらだちて。人をのりつゝありく。そむあまなふをのこの
よなひたる箱よ。風鈴といふ物ゆひつけて。風のまよゝゆりならしつゝゆくをよびと
めて。たちながらくふめり。ひともし。ふたもり。さらゝとくひて。口おしのごひつゝ。い
ざとて手ひきあひて。ゆくゝ聲ひとまきまぼりあげてうたふ

わがおもふ　　なよがしとのり　　なごおそま
いとなみつくる　　あらぐつの　　いでまあへぬか
かなどきせるか

歌さへこちなげよて。いとまゝよくしや。そもいかなるひとのおちあふれて。かゝる身と
なりよたるならん。あやしうも。やうかられる女のふるまひよぞありける

都の手ぶり終

明治廿三年十一月十五日印刷
同 年十一月十七日出版

版權所有

校正者 編輯者

佐藤定次

東京小石川區西江戸川町一番地

同

富山健

同 牛込區藤土八輪町二十三番地

發行所

吉川半七

同 京橋區南傳馬町一丁目十二番地

關西大賣捌所

松村九兵衛

大阪南區心齋橋南一丁目

發賣人

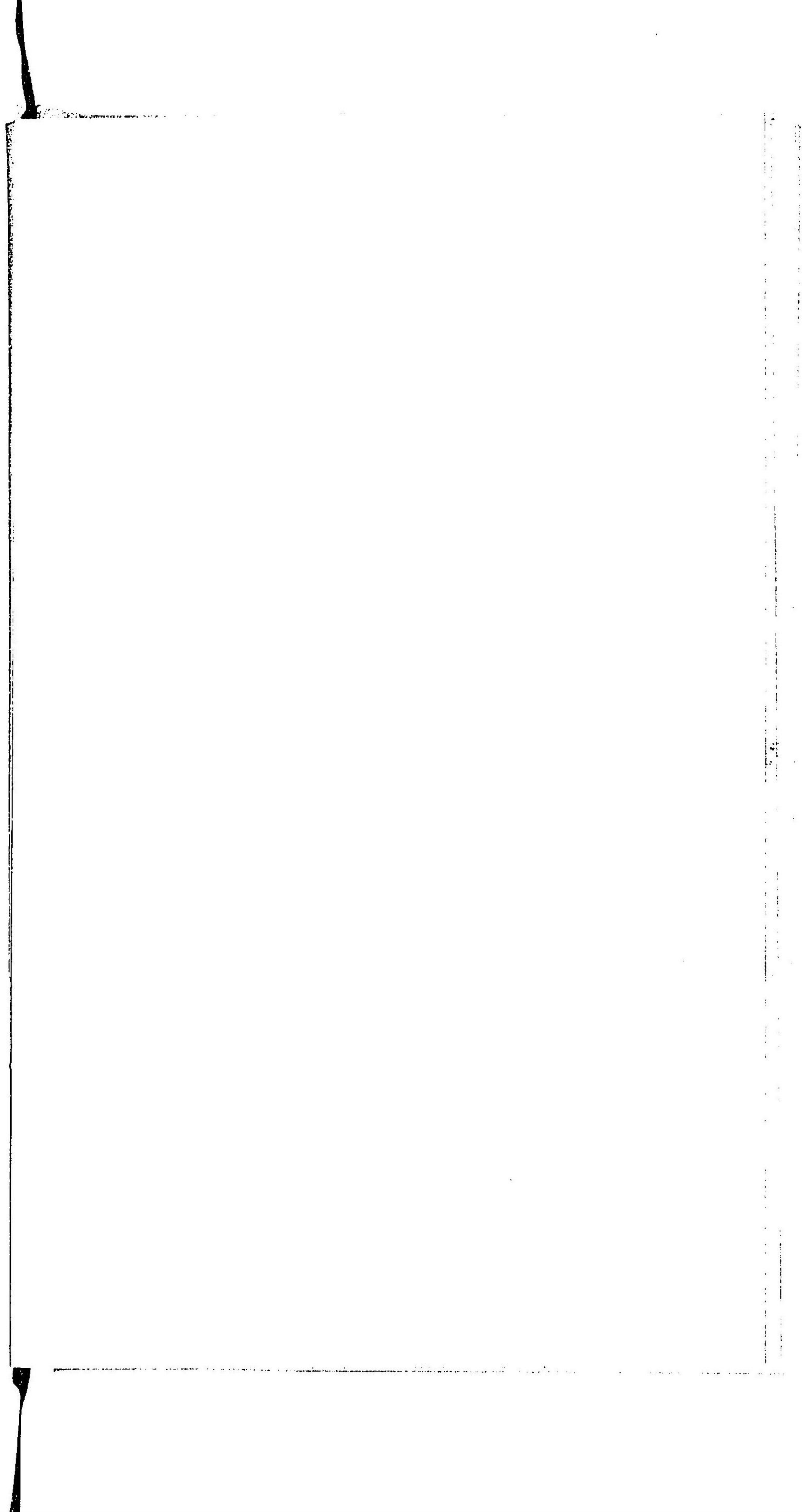
林平治郎

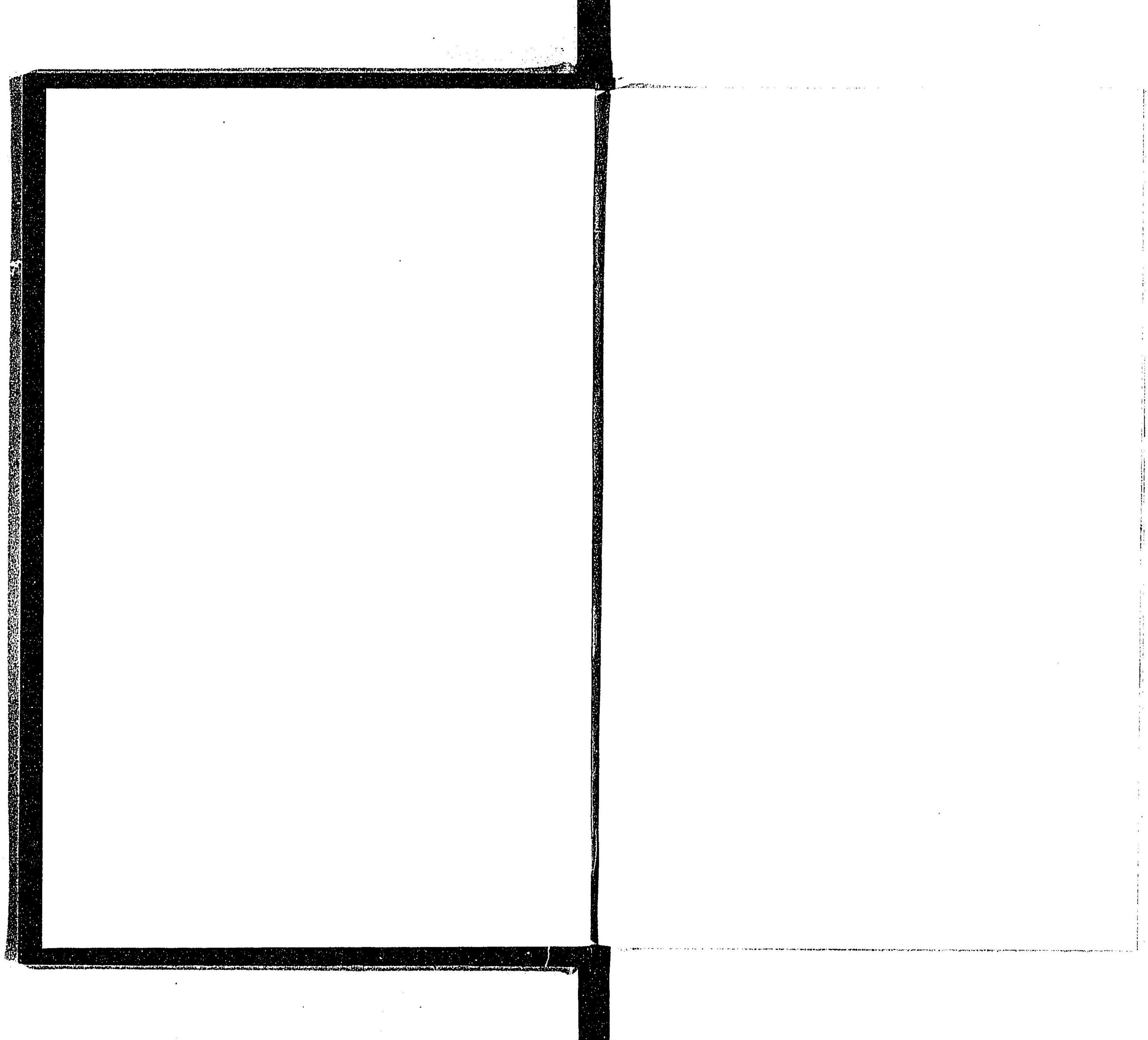
東京日本橋區箱屋町八番地

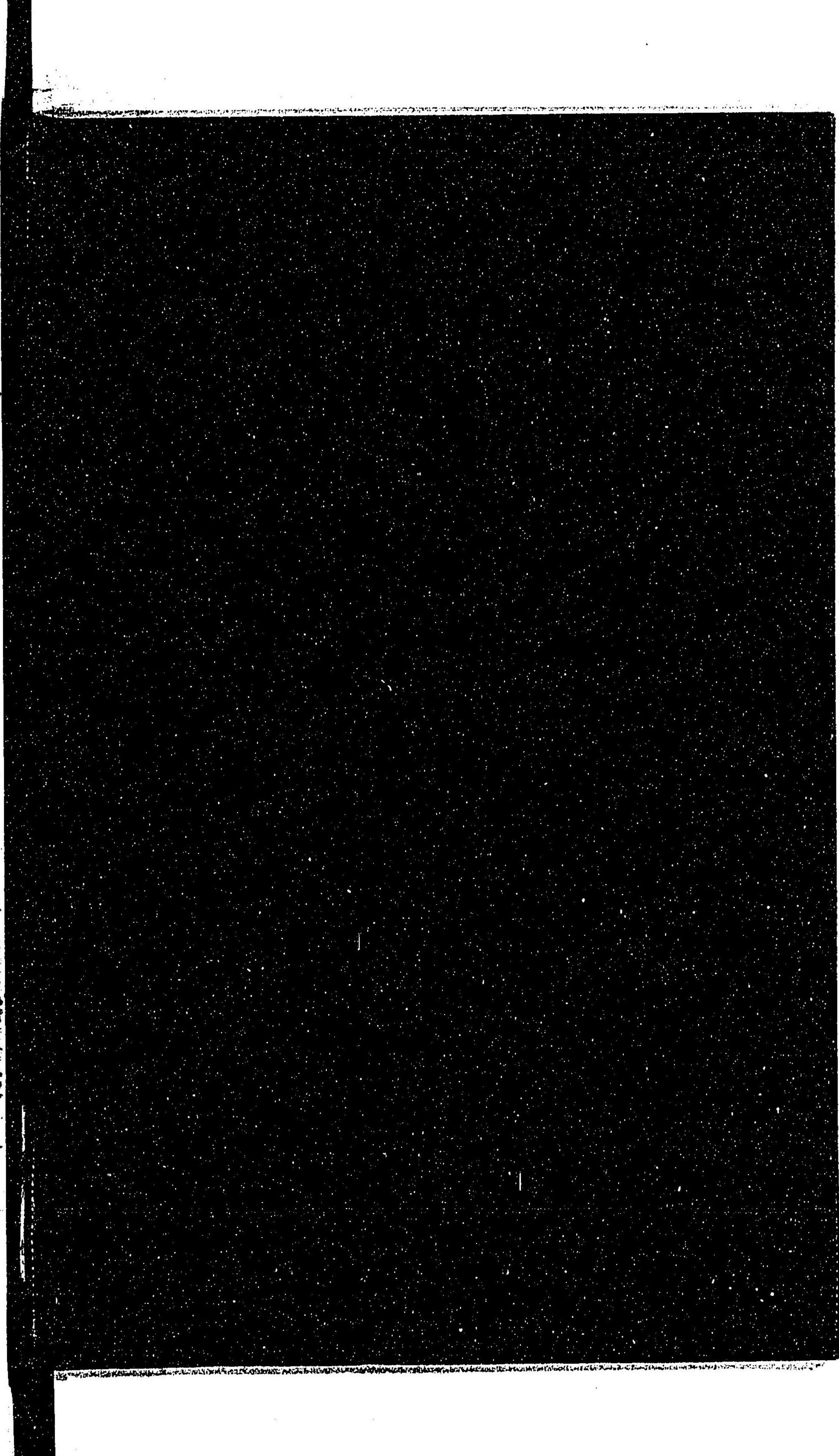
印刷所

必昇社

東京々橋區錦屋町九番地







914.5

H997

I

095950-001-8

914.5-H997I

百家説林

今泉 定介

畠山 健 / 編

M23-25

DBR-0199



Faint, illegible text or markings along the left edge of the page.

1000